

JKが紡ぐ、青春協奏曲

かにかま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コンビニでバイトしてる大学生とその後輩達によつて紡がれるラブソング！

……そんなわけもなく、主役にも脇役にも、そもそも物語に絡むかもわからない青年を中心として動く世界を描いたものである。

——演奏するもしないも個人の自由、だよね！

目次

1.	あるコンビニの夕勤風景	1
2.	ある大学生の日常	11
3.	あるカッパルの日常	20
4.	あるゲーマーのオフ会	30
5.	あるドラマーの天体観測	42
6.	ある妹の訪問	60
7.	あるバンドのライブ	72
8.	ある学生達の夏休み	89
9.	ある大人達の集まり	104
10.	ある秋の日々の日常	118
11.	ある悩めるJKの青春協奏曲	135

150 1 2.
ある物語の終わりの始まり

1. あるコンビニの夕勤風景

ここはコンビニ。

そう、何の変哲もない普通のコンビニエンスストアである。

近くに羽丘女子学園っていうそこそこ大きな女子校があるわけで、今日も朝から「きやはは」とか「うふふ」だとか青春ガールズトークという若者しかできない話術をしてる若人達がお金をたくさん払ってくれた。

隣町にも女子校があるせいなのか、この辺の女性人口率は半端ない。俺結構レアだよ、希少価値のある男だよ。

さて、そろそろ後輩達も来る頃か。一応今日は店長からチーフ任されてる身だし、しっかり働こうかね。もう、出勤してきて一時間経ってるけど。

「失礼しまーす！」

「JK二人、到着いたしました。お待ちどー」

「おう、学校お疲れさん！ま、とりあえず茶でも飲めよ、暑いだろ？」

「やったー！さっすが五葉さん！わかってるうー！」

「いつつーさん、パンはないの?」

「遊びたい盛りの大学生の財布の軽さ舐めんよ青葉」

まったく、このポヤポヤ系女子は、隣の今井を見習いなさい。

何の文句も言わずお茶を飲んでるだろ。

もうゴールデンウィークも終わって、気温も上がってきたからな。熱中症にでもなつたら大変だからな、うん。

「じゃ、いつも通り着替えたらレジと商品並べ頼むわー。俺ちよつと一本吸ってくる」

「おっけーです、ほどほどにね」

青葉が手を振ってくるからとりあえず振りかえすけど、お前、服はせめて更衣室で脱げ。

人が来るまで喫煙室行けなかったからなあ、この一本がないと仕事できねえ。本来この時間俺や後輩二人以外にも一人いるんだが、今日は用事で休んだ。

「ちよ、モカ早くしなつて!また店長に怒られるよ!」

「ふっふっふっ、その点は大丈夫だよリサさん。モカちゃんもリサさんもかわいいかわいJ Kだから許してくれるってのが世の理だよ!」

「はいはい、可愛い可愛い!でもちゃんとメリハリはつけようね!」

「……は〜い」

とりあえず、店長に報告することが増えたつと。

そろそろ発注した商品のトラックが届く頃なんだけどなあ、来ないと俺店側に行けないぞ。

さつきまで五分くらいレジに店員が無人って状態だったし、それもこれもトラックが悪い。そういうことにおこう。

※

「いっつーさん、お疲れさまでーす」

「おー、青葉はもう上がり？」

「ですです。お先に失礼させてもらいます」

早いなあ、もう三時間も経ったのか。いつの間にか煙草も一箱なくなりかけてやがるし、吸いすぎだろ俺。

「いっつーさん、次の差し入れは山吹ベーカリーのパンをお願いしたい」

「馬鹿野郎、わざわざお前のために花女近くの商店街まで行けと？」

「あ、交通費も奢りって形で」

「結局俺が払うんじゃないかッ!!」

なんて恐ろしい後輩だ！

こんな奴と毎日のように付き合わされてる人はさぞ苦労してるんだろうな、うん。そうに違いない。

もし、青葉の友人に会うことがあったら山吹ベーカリーのパンを奢ってやろう。

「じゃ、モカちゃんはお先に失礼しますね〜」

「んー、どうせ仕事も落ち着いてきたし、途中まで送ろうか？最近物騒だからよ」

曰く、少女を追いかける黒服の集団が目撃されたとか。

曰く、夜道を疾走する馬に乗った人物を目撃した人がいるとか。

曰く、商店街のマスコットキャラミッシェルの偽物がこの辺に出没したとか。

「……路地裏に連れ込んだりしないよね」

「するか、アホ」

何故高校生に欲情せねばならんのだ。

それに彼女いるし。

「じゃあ、せっかくなのでいっつーさんとモカちゃんのナイトデートでもしちゃおう？」

「ここから駅までだよ。どこまで行く気だよ」

「——至極のパンを求めて三千里！」

「はあ、行くぞ」

「こいつは、こんなだからちよつと心配になっちゃうんだよな。」

今井はきちんとしてるけど、青葉はどこかぼやあってしてるし、何考えてるかイマイチわからん。

「暇、しりとりでもしよ」

「しようがないなあ、しりとり」

「りんご」

「ごりら」

「ラホーハ」

「…… 版画」

「ガレット・デ・ロワ」

「わ!?わ、わ、わ…… 藁人形!」

「ウエルシユケーキ!」

「きつつき!」

「キプフェル!」

「ちよつとストップ!タンマ、その言葉本当に存在してんの!?!」

なんなんだ、さつきから!聞いたこともないような単語並べやがって!

正誤がわかりにくいから、判定つけられねえじゃねえか!

「失敬な、きちんと存在してるよ!」

「そいつは失礼しました！俺が無知だけなのかな!?」

こいつ、アホなのか天才なのかわかったものじゃねえな！

「そういうわけで次、いっつーさんの番ね〜」

「え、まだ続けんの？」

※

青葉を送った後、俺は一本吹かしながらコンビニに戻ることにした。

途中、ギターケースやら大きな荷物を持った女子高生、多分あれは花女の方の制服だったな。集団を目撃した。

バンド、つてやつか。いやあ、青春してますなあ、若いってのはいいねえ。

バンドといえば、姉貴の会社がたしかそういう雑誌を取り扱ってる会社だったような、そうじゃなかったような。

のんびりと近くの自販機でコーヒーを買って、戻ると今井が休憩に入ってた。

「あ、五葉さんお疲れさまでーす！さっき店長来てましたよ」

「げ、マジかよ」

あの人今日はもう来ないと思ってたのに、めんどくせえ。

またシフト増やされたら、今度こそ労働組合に訴えてやる！

「まったく、俺もそろそろレジに戻るかなあ」

「ていうか、五葉さん吸いすぎじゃないですか？健康に悪いですよー！」

「いいんだよ、人生は一度きりなんだ。やりたいことやらなきゃ損だよ、損」

「いちいち規制とか体のこととか気にしてたらキリがない。ま、これは俺が現在一人暮らしをしているからできることであって、実家に帰ると確実にどやされる。」

「さて、あと二時間頑張るか」

「そうですね！ていうか、最終私たち二人だけになっちゃいますね」

「え、まじ？」

※

「おつっー！あ、君禎じゃん、おつかれ！」

「おー、来たか海輝。じゃ、そろそろ俺らは上がりか」

「……なあ、君禎、前々から思ってるんだけど、お前って俺のこと嫌いなもの？なんで俺が来る時間にシフト上がり設定しちゃってるの!？」

「わざとだ、お前と一緒だと仕事にならねえからな」

「ヒデェ!？」

というわけで、午後十時。俺と今井はここで上がりだ。

高校生の今井をこれ以上遅い時間まで店に置くわけにはいかないし、なにしろこのアホが来たからな。

「白夜さん！お疲れ様です、じゃ、頑張ってくださいね！」

「リサちゃんもあがりかあ、とりあえずその制服貸し——」

「黙ってる、変態」

「あ、君禎のでもいいよ！」

「アホか、蹴るぞ」

「……五葉さん、もう蹴ってますし白夜さん痙攣しちゃってます」

このド変態、そのうち110番通報してやる。男だろうが女だろうが、他人の着た服で興奮するとか、特殊性癖すぎて俺には理解できない。

違うな、理解したくない。

「じゃ、鍵置いてくから後よろしくな」

「それじゃ、失礼しまーす！」

ま、そのうち店長も来るだろ。先輩もレジにいたし、時間帯的にも人は少なくなるはずだ。応援要請が来ても行く気はないけどな。

「そういえば、五葉さんと白夜さんって同じ大学なんですよね？」

「まあ、不本意ながらね。あいつは留年してっけど」

そう、受験の時も一浪して、さらに留年までしてると来た。

本来ならば出会うこともなかったろうに、あの変態が馬鹿だったせいで妙な縁ができてしまった。

「……今すぐ縁を断ち切りたい」

「まあまあ」

今井は苦笑いしてるけど、俺は割とガチだったりする。

まあ、DQNにまで堕ちてしまった弟に比べれば全然マシだけだな。

今井と雑談をしながら帰路につく。学校のこととか、妹のこととか、その他趣味とか料理のこととか何やかんや言いながらも話題は尽きない。

あと、俺の下宿先と今井の家は割と近所だったことも半年前に判明した。

なので今井の家族さんにも顔が知れることとなつて、バイトで遅くなる時はできる限り一緒に帰ることが多い。

店長も融通利かせてるし、今井の母親も安心してくれてる。

たまに今井の父親と幼馴染にすっごい睨まれるけど、うん、気にしちやダメなやつだ。「それじゃ五葉さん、今日もありがとうございました」

「気にすんなつて、また筑前煮余つたら分けてくれ」

「了解です！」

あいつの作る料理は本当に美味いからなあ、なんか負けた気分になる。

負ける気なんて更々ないけどな！一人暮らしだし、講義は週に四日だけだし、時間はあいつよりもある！

下宿先のアパートに戻って、シャワーを浴びてからパチってきた消費期限ギリギリの弁当を食って片付けを済ませてから寝た。

まあ、興味は一切ないだろうが、これが俺五葉君禎の日常である。

名前にフリガナを入れると、いつつばきみさだ、になる。いつばじゃなくて、いつつばな。つは二つだ。

……一人暮らしし始めてから独り言が増えたな、寝るとしよう。

※

次の日、今日はバイトも学校もないからCDでも買いに行こうかとアパートを出たら青葉に捕まった。ちよつと待て、お前何で俺のアパート知ってるんだよ？

2. ある大学生の日常

青葉に連行されて来た場所は商店街にある山吹ベーカリー。

——うん知ってた。

こいつがこの店の常連であること、ポイントカードがキャパオーバーして既に8枚目に突入していること、そして今日は土曜日で限定モノが発売されるってこともな！

「……で、なんで俺も一緒に来る必要があったんだよ。てか、何あの行列？」

「えー、いっつーさん前に『その限定パンつての興味あるな、次買いに行く時俺も誘ってくれよ（キリッ！）』って言ってたじゃ〜ん」

「キリッ！はしてねえ、何いらんこと付け足しちやつてんの!？」

たしかに言つた気がするけど、言つた気はするけどよく覚えてるなコイツ。

「で、あの列はパンを買い求める猛者達の列、私たちも行くんですよ〜」

「え、あの中に？コミケ並じゃない？あれ」

「——さっさと行くよ、モカちゃん隊長についてきて」

「お、おう」

出会って一年ちよつと、青葉のことを素直に頼もしいと初めて思った瞬間だった。

※

「ふいふ、大漁大漁！」

「…… ついでに色んなもの買いやがって、店員さんドン引きだったじゃねえか」

「違いますよ、さーやのあれは営業スマイルってやつだよ」

「どつちにしろ本心隠してるぞ、それ」

全く、目的のパンのついでにチョココロネ買うだけ買いやがって。

なんか後ろの方で「え、さーやちゃん！チョココロネもう売り切れなの!？」って騒いでる客がいるぞ、お前買い占めたんじゃないだろな!?

あと、俺の好みのクロワッサンを目の前で食うんじゃないやねえ、腹減る!

「いつつーさんもいる?クロワッサン」

「もらう」

あ、やっぱり美味しい。

俺も限定パン以外にいくつかクロワッサンを買ったが、青葉ほどじゃない。

ていうかメニュー全部二つずつ買うってどうなのよ、全部ポイントカード払いってどうなのよ、その栄養どこにいつてるんだよ、ホントに。

「あ、蘭だ」

「も、モカ!？」

ん、青葉の知り合いか？

着物を着て黒い短髪少女だ、左側前髪に赤いメツシユを入れている。

近頃のカギは、まあ、俺も髪を部分的に色抜いてるから人のことを言えた柄ではない。

「あ、いや、その、これは!」

「あの蘭ちゃんが生派になって、およろしく」

「これは、その、華道の集まりがこれからあるから!」

「写真撮っていい?」

「茶化さないで!てか、やめて!」

「顔真つ赤だよ?もしかしてモカちゃんといっつーさんが間接キスしたところでも見られ

ちやつたのかな?」

「え?」

「え?」

あれ、俺はいつコイツと間接キスなんてしたんだ?

「え、違うの?」

「違うし!ドサクサに紛れて撮るな!」

ギヤーギヤー騒ぐ（一方的に赤メツシユガールがだけど）二人をどうするべきかと、とりあえず無理に介入せずに眺めておくのが正解かな。
さつき買ったクロワッサンでも食べておこ。

※

二日後、今日も元気に頑張るぞい！

そういうわけで夕勤だよ！やったね、お給料が入るよ！

さて、今日は結構スタツフも多いから割と暇なので今井と一緒にレジに立ってる。

「五葉さんってさ、大学行かなくていいの？」

「知ってるか今井。日本の大学なんざ入ったら勉強なんて必要最低限でいいんだ、ましてや講義なんてサボるもんだ」

「へえ、自由なんですね」

「まあな」

海輝のアホはどうか知らんが、俺は普通に現役で合格して留年もせずに進学したからな。

それに経済学部だからな、ホントにやることがない。部活とかサークルにも入ってるわけじゃないし、家においてやることと言えば家事とかネットゲーくらいだ。

「でも、それは高校まで頑張ってたからできることだ。今からサボってたら痛い目見るぞ」

「あ、あはは、なんか五葉さんに説教されてもあんまし実感わかないや」

「おい、それはどういう意味だ？」

「——あ、いらつしやいませー！」

問答しようとしたら客が来た、チキシヨウ。

ていうか、あいつ立ち読み勢かよ！あと一分経つても出て行かなかつたらさり気なく帰らせて、ありがとうございましたー！もう来店なさらなくて結構ですー！って言うてる！！

…… やつたら店長に怒られた、チキシヨウ。

※

二時間後、さつきのこともあり、元々人数が揃ってたこともあり俺と今井は早上がりになった。

時間はまだ八時、いつもよりちよつと早いくらいだ。帰ってログインして徹夜するか。

ん、あの人影は……

「あれ、まりな？」

「君禎？バイトは？」

「今終わった、そつちも帰り？」

「うん！」

まりなも丁度帰りなのか、珍しく帰りが被ったな、あの立ち読み客に感謝するのは癩
だけど、感謝しよう。癩だけだな。

「あ、リサちゃんもいる！もしかしてバイト一緒なの？」

「あれ、まりなさんと五葉さんって知り合いだったんですか？」

「うん、俺の彼女」

「…… ええ!？」

そんなに驚くなよ！傷つくぞ！

「えっと、私、お邪魔だったりします？」

「妙な気遣いしてんじゃねえよ」

※

今井を送り、近くの公園でまりなと久々に他愛のない話をして過ごした。
俺としてはあの二人が知り合いってことに驚いたよ、だって接点ないし。

なんでも今井はRoseliaっていうガールズバンドのベースをしてるらしい。それでライブハウスにもちよくちよく顔を出してるとか。

まあ、合点はいったが、あの今井がバンドしてるなんて知らなかったな。お互いプライベートのことはあんま話さないし、話すこともないし。

さて、とりあえず今日もやるか。

PCを立ち上げて、書きだめしておいたレポートはとりあえず放置してブシロードの提供してるネットゲーのアイコンをクリックする。

さて、と、今夜もイベント走るとしますか。

えっと、あいっからはもう、ログインしてる。さすが、ガチゲーマーだ。

とりあえず挨拶しておこう。

クローバー【おっす】

? 大魔王ツバサ? 【あ、クローバーさんどうもです! (≡▽≡)】

プラチナ【こんばんは、今日は早いですね】

? 大魔王ツバサ? 【ま、私よりは遅いけどね!】

クローバー【バイトが早く終わったからな。さて、どれ行く?】

? 大魔王ツバサ? 【もち、限定武器の素材回収でしょ! (^o^)/プラチナもいれ

ばらくしよーらくしよー！」

クローバー【了解】

プラチナ【じゃあ、装備整えてきます】

ヒナ【あ、もう揃ってた感じ？】

クローバー【突然来るなよ！怖いわ！】

ヒナ【えー、でもラグってしょうがない？】

クローバー【こつちから見たら急に何も無いところから来たようにしか見えないんだよ…】

？大魔王ツバサ？【すっげー！今のどうやったの!!?】

ヒナ【ひみつー！】

クローバー【… やろうとしてできることじゃないでしょ】

プラチナ【お待たせしましたー、ってヒナさんこんばんは】

ヒナ【プラチナさん、やつほー！】

クローバー【じゃあ、全員揃ったことだし行きますか！】

？大魔王ツバサ？【おー！（≡▽≡）】

ヒナ【はーい！】

プラチナ【頑張りましょう】

……結局、俺は日を跨いで五時になるまであの三人と一緒に素材回収クエストを周回してた。

そして、目に隈を作った状態でバイトへ向かった、ガチ廃人って怖い。

3. あるカップルの日常

六月になった、最近雨続きで洗濯物が乾かなくて困ってる。

バイトもヘルプで入ることが増えた。

バイトといえ、この間の立ち読み客追い出したことがネットニュースに上がってた。批判もあれば称賛の声もありで複雑な気持ちだったけど、店長が「やったね！これでうちの知名度上がった！」とか喜んでたこともあり、特に処罰はなかった。

まあ、ヘルプが増えた理由としては高校生組に中間テストがあつたからだ、今となつては懐かしい。

だけど青葉だけは来てたな、あいつ補習とか受けてそうだけど大丈夫なのかな？

二日ぶりの晴れなので、散歩がてらスーパーに買い物に行こう。そろそろ貯蓄していた食料品が底をつきそう。明後日まりなも久々にウチに来るし、ちよつと奮発しておくか。

「タイムセール！タイムセール！今日は惣菜が安いよー！数に限りがあるから早い者勝ちネー！」

——つしやあ！これで一週間は凌いでやる！！

※

ピンポーン。

我が部屋の鳴ることがほとんどないインターホンが鳴る。

もう来たのか、思ったより早かったな。

「あ、君禎。ちよつと早く来ちゃったけど、大丈夫かな？」

「ああ、全然大丈夫。片付けも済ませたし、掃除もしといた」

「……そういうことって隠しとくものじゃないの？」

「隠したところでだろ、それにまりなに嘘つきたくないし」

「そ、そう」

まあ、今日は久々に二人で過ごすんだ。楽しくやりたいし。

「まあ、上がれよ」

「お、お邪魔します」

まりなを入れて扉を閉めて五重の鍵を掛ける。

よし、きちんと全部掛けたな。

「……何もそこまでしなくてもいいんじゃない」

「甘いよ、ここままでしないとあの状態が上がりこんでくる」

「ああ、白夜君！彼ってあと何回留年するのかな？」

「知らん」

まあ、他人の人生なんて知ったこっちゃねえ。

小さな机に向かい合って座る。なんだろ、改めて向かい合ってみると本当にまりなつて美人なんだよな。

よく、こんな先輩と付き合えることになったな、ホント人生ってよくわからん。

「君禎最近大学行ってるの？」

「いや、出る講義ないし。まりなは？」

「私も、もう必要な単位は取ったし卒論のことくらいでしか行くことないかな」

「つてことは、あのライブハウスのバイトが続いてんのか？」

「そうだね、最近になって新人君も入ったからこうして君禎に会える時間も作れてるし」

「…… お、おう」

あー、ヤバイわ。破壊力ヤバイわ、浮気なんて出来るわけねえ。

「すまねえ、一本吸っていいか」

「もう、まだ吸い続けてたの!？」

「…… まあ、うん」

「健康に悪いからやめといた方がいいよ！今すぐにでも！」

「いや、でも、ちゃんと室内では吸わないから、さ！」

「…… 仕方ないなあ、あまり触れないつもりだったけど、最近また本数増やしてるんでしょ？リサちゃんともカちゃんから聞いてるよ」

「おま、青葉とも知り合いなのかよ!?!」

ヤバイ、今井ならともかく、青葉は何口走るかわかったもんじやねえ！

とりあえず一本吸わせてもらうか、窓を開けて換気扇回して、ふう。

「あれ、知らないの？モカちゃんもうちの常連だよ」

「…… っことはあいつもバンドしてんのかよ」

なんてこった、俺の周りの知り合いはバンドしてる法則でもあんのか？

海輝の野郎もやってる、なんてことはないよな。ありそうで怖いけど。

「…… 最近のバンドブームには恐れ入るぜ」

「本当にすごいよ、皆上手だし」

—— いやあ、青春してますなあ、十代！

「あれ、でも君禎も昔やってたんじゃなかったっけ？」

「お遊び程度だよ、そこまで本格的なもんじゃねえ」

「そうなの？」

「そうなの」

実際、半年ちよつとで解散したし、五年くらい前の話だし。

姉ちゃんの紹介だったっていうのもあるからな。

「そーいや、姉ちゃんがまた今度ガールズバンドの取材でそっちに行くかもしれないつてさ」

「柚子さんが？」

「近いうちにアポ取りに行くって言ってたから、一応伝えとくわ」

姉ちゃんは現在バンド関連雑誌を発行する職についてる。そんなわけで嫌でも情報が今までは入ってきてたわけ。

二本目の煙草を吸おうと箱から取り出したところで、まりなの腹がぐううと鳴った。ヤバイ、可愛い。

「そーいや飲まず食わずでだいぶ話し込んだな」

「そ、そーね！そろそろ飲みましようか！私お酒持ってきてるの！」

「……え？」

——どうか、苦情が来て追い出されませんように。

※

「あははははは!!それでね、聞いてるの、きみさだー!? ていうか飲んでるー!!」
「の、飲んでるよ、うぷ」

こ、この酔っ払いめ!

ていうか相変わらず持ってきた酒のラインナップがおかしい!スピリタスにジンに
バーボンにテキーラとか、頭おかしいんじゃないやねえの!?

俺を殺す気が、俺の彼女は!?

水割りでもしんどいつてのに、ていうかこんだけ度数が馬鹿高い酒をどっから調達し
てきたことやら...

このペースで二時間も飲み続けてるつてのによ、なんでまだ飲めるんだ?

ピンポン。

げ、まさか早速苦情か!?

「はいは〜い、いまでまーす、よー!」

「お前が行くなあ!」

マズイ、普段のまりなならともかく、あの酔っ払いを玄関に立たせるわけにはいか
ねえ!

足がガクガク震えるよ、クソ、皆も無理な飲酒はいけないぞ!自分のペースは守れよ
!

ていうか、なんであいつうちの鍵の解鍵ボタンの存在を知ってんだよ!」

「あ、五葉さ… まりなさん!」

「りさちゃんじゃないの〜こんばんは〜」

よかった、苦情じゃなかった。

つて、そうじゃなくてこのタイミングで今井だと!?

「ちよ、まりなさんが何でここに!?!?ていうか酒臭!」

「うへへへ、わけえ高校生だあ」

「に、逃げろ今井!今のまりなに関わるな!」

「…五葉さん、夕食が余ったから持ってきたんですけど、いりますか?」

「あ、肉じゃがだ。ありがとね〜」

「お、お、お前が受け取ってんじゃねえ!すまねえな今井、わざわざ夜遅いのによ」

「え、えつと、もしかして私お邪魔でした?」

「いや、んなことない。けど、夜も遅いから気をつけて帰れよ」

「なーに言ってるの!送ってってやんなさいよ!」

「今のお前に俺の部屋を任せられるか!」

「この酔っ払いを一人部屋に置いとくわけにはいかねえ!

「ほらほらほらほらほら!りさちゃんもどーう?ウオツカ」

「高校生に酒を勧めるな！しかもそんな度数が馬鹿みたいに高いやつ!!」

※

十分後、まりなは眠りについた。

「……悪いな今井。付き合わせて」

「い、いえ、なんかその、こちらこそ」

ベッドで眠ったまりなを置いて今井を家まで送っていく。酔いも覚めたし、歩けるレベルにまでは回復した。

まりなの暴走を止めるのに精一杯で飲んでる暇がなかったっていうほうが正しいのかもしれない。

「あのー、まりなさんって普段からあんな感じなんですか？」

「酒を飲むとな。しかも、自分から度数が高い酒を買ってきてあんな風になってる」

「あ、あははは」

あいつも禁酒すべきだ、そうすりゃ俺も禁煙を考えたもしい。

「あと、肉じゃががありがとな。惣菜が切れちまって食う物に困ってたんだ」

「いえいえ、また何か困ったことあったら言ってくださいね！」

ええ後輩や。

※

「貴様にリサはやらんぞー！酒臭いぞ若造ー！」

「娘さんと俺は釣り合いませんよ！ていうか俺にはもう彼女いるって何度も言ってますよね!？」

「いやー、何回してもこのやり取り飽きなくて！つい！」

「五葉さん、毎度夫の茶番に付き合ってもらってありがとうございます。よく言い聞かせておきますので」

「茶番!？」

「あ、いえいえ。あと、肉じゃがおいしかったです」

「…… お父さん、恥ずかしいからやめて」

うむ、今井のご両親は今日も変わらず愉快な方だ。

※

俺は結局床で寝た。まりながベッドを独り占めしてるからだ。

ていうか、ほとんど寝れなかった、頭がめっちゃガンガンする。

「ん、おはよ、君禎」

「…… おはよ」

「シャワー借りてもいい？」

「どうぞ」

よかった、酔いは覚めてるみたいだ。

記憶の方は微妙なところだけど、俺の部屋に泊まったっていう事実を受け止めてるっ

ほい。

まりながシャワーに行ってる間二本吸った、やつぱやめられねえや。

俺はとりあえず二日酔いが原因で今日のバイトは休んだ。

4. あるゲーマーのオフ会

梅雨が明け、先日応募した日雇いバイトの面接に向かうために地域の自治会館へ向かっている。

場所というと花咲川の商店街と住宅街のちようど間くらいのところだ。

「失礼します、先日お電話させてもらいました。五葉と申します」

「あ、どうぞどうぞ」

失礼します、と。

「ふむ、君が五葉君禎君か。公立華丘大学の二回生、今はコンビニでバイト中らしいね」

「はい」

「一人暮らしかい？」

「はい」

「……髪、黒染めする気はないのかな？」

「やっぱり、マズイですか？」

懸念してたのはここだ。部分的に脱色してるためシルバーにも似た色と元々の黒髪のツートンになっている。

コンビニの方は店長が緩かったのでなんとかなった、今井と青葉、それにあの変態はコネだとしても、バイトできてるんだ、それに髪色に関してはこの街でどやかく言われることはないと思ってた。

天然か染めたのかはわからないが、個性的な髪色が多いからな。

「いや、この際目を瞑ろう。言い始めたらキリがない」

「あ、はい」

なんだろ、なんか物凄い苦労してきてらしたのかなと思う。

向かい合ってるだけで哀愁が漂ってくる。

「で、今回の仕事内容の天体観測の引率スタッフなんだけど、星に関しての知識は？」

「基本的な名前と、形くらいは」

「なら、いいか」

「軽?!」

え、そんなにいいの!?

思わず声に出しちゃっけど、本当にそんなのでいいの!?

「いいのいいの、どうせこの辺でしかやらないような、小規模なイベントだから。五葉君もこの辺住みなんですよ?」

「ま、まあ一応」

「ならいいか。当日もよろしくねー」

そういうわけで、日雇いが決定した。

※

とは言ったものの、星に関する基礎的な知識はあった方がいいだろうと思つて図書館へ行くことにした。

名前と形だけではさすがに味気ない、他に誰がいるかわからないが雑学なんかも交えた方が楽しくなるはずだ。

大学の図書館でもよかつたけど、距離的に街の図書館の方が近い。

久々に来たなあ、中学の時以来かもな。全然変わつてないや。

あそこに植えてあつた木が随分大きくなつてる！スゲー！

平日の昼だし、人が少ないな。土日に来ると小中学生が勉強しに來たりしてるんだけど、俺にとってはこのくらいの静かさが丁度いいかもな。

——小中の頃、騒がしい家族から逃げ出すようにして図書館に入り浸つてた日々も思い返せば懐かしい。

姉ちゃんもライブハウスを巡つては色んなバンドを応援してたし、君邦はアホだし、蜜柑は、うん、今井に迷惑を掛け続けてるに違いない。

そして俺はここで色んな本を読んだ、だから星関連の本がどこにあるかすぐにわかる、やっぱここか。

昔つから変わってないな。それにしても、数年ぶりの流星群か、ニュースで見たときちよつと興味惹かれて、この辺で見れる場所にちよつとツアーのバイト募集してたから、どうせなら金も稼ごうって下心はある。

参加費払うよりも、収入になった方が嬉しいし。

にしても、知識って使わないと忘れるものだな。昔はもつとわかってたつもりだったのに、大分わからなくなってきた。

ま、一回覚えたことあるやつだし、見返せば思い出すでしょ。数式とか見るよりはまだ苦じやないからな。

※

うお!?!閉館時間間近じゃねえか、ヤバイヤバイ!
帰って夕飯の仕込みとか洗濯物とか回さねえと!
ていうか、今日夜勤だった!

※

ネットゲーのイベントが本日付で終了した。

目的だった武器は何とか最終段階まで進化することができて、満足満足。

ランキング報酬も上位のものではないが、中の上のブツを回収することができた。

さて、明日は日曜日だから、うちのトリオチーム恒例のあれだ。

——イベントの打ち上げ！

※

まりなのバイト先のライブハウスCIRCLEの外には小さなオープンカフェがある。

センタースペースには噴水があるのだが、ある日は盆栽、ある日には足湯と時々ありえないだろって頻度で変わったりする。

商店街のマスコットキャラのミッシェルの銅像が建つていたときは焦った。

さて、いつも通りプラチナ、もとい白金と？大魔王ツバサ？、もとい宇田川の二人と一緒に席に座ってメニューを注文する。今日は臨時収入もあるから俺の奢りだ。

「す、すみません」

「白金、こういうときはありがとうって素直に言っとくん。宇田川を見てみる、一番高いの注文したぞ」

「あ、あこちゃん！」

「りんりんも早くしようよー！あこ、早く食べたい！」

うむ、宇田川。お前が中学生だとは思わなかった。初めて会ったとき素で小学生だと思っただけだからな。

そして白金も、大学生で一つ年下くらいだと思ってたが、高校生だとは思わなかった。正直、こんな両極端ともいえる二人が親しい仲だと知ったときも驚きだったけどな。

「ま、そう気にすんなよ白金。素直に奢られとけ」

「で、ではお、お言葉に甘えて——」

ちなみにこのオフ会でマカロンタワーを頼むのは恒例行事となっている。

飲み物と食べ物それぞれの手元に届いたところで宇田川が素早くマカロンタワーのピンク色のマカロンに手を伸ばす。これも恒例行事だ。

「あ、あこちゃん！」

「いいんだって白金、子供は元気なくらいがちようどいいんだ」

「そーだよりりんりん！ここは五葉兄ちゃんに甘えるのが正解だよ！」

うむ、何度も思うが俺にはこいつがとても中学三年生にはとても見えない。

「それにしても、今回のボスは耐久高かったよな」

「そう、ですね。特に弱点が風だけ、というのもネックでした。風で火力の高い武器は、

限られてますので」

「だからって無属性で押ししたとしてもダメージカットがあつたからなあ、よくソロ周回できたよな白金」

「あ、あれくらいなら…」

さすが、今回のイベントランキングトップ十に入っただけのことはある。

平日は学校もあるだろうに、全国の廃課金者が涙するぞ。

白金のプレイは実際に無駄がないからな、必要なところで必要なことしかしない。だから強い。

「でも、今回の武器の見た目微妙に格好良くなかったよね」

「——愚か者！性能バカみたいだっただろうが！」

「——そうよあこちゃん！あれは今後絶対に必要になってくるから！」

「あ、はい。り、りんりんが珍しく怒ってる」

宇田川は基本見た目が格好よければそれでいいみたいだ。まあ、俺も昔はそうだったからな。

見た目が強そうだったり、限定とかは強いと信じてどれだけ育てたことか。

ああ、ポケットのうちのモンスターの話な。

「それに、今回は久々に、スクフェスの、方のイベントもやって、たので」

「え？それであのスコア？」

※

「そういえば、あのヒナって人は誰だったの？」

「え、あこちゃんの知り合いじゃなかったの？」

「違うよ、あこあんな人と狩りに行ったことないし」

「あー、多分俺がソロ時代にエンカウントした人だ。フレンド履歴見たら結構前に登録してた」

俺が一本吸ってる間に話題が変わってたらしい。

そういえば最後の方でヒナも来てたんだな、あの気まぐれはぐれプレイヤー。

「あこ、今度のオフ会、誘ってみようかな」

「え、ええ!？」

「りんりんもいい加減他人と会うの慣れなよ」

そういえば、俺と初対面するときも凄かったな。

無言で諭吉さんを差し出されたときはどうしようかと。

※

四日ぶりの夕勤だ。

今日は青葉とレジ、客も少なくスタッフも少ないため大変平和だ。

「ありがとうございますましたー」

「さんしゃいんく、あう!？」

「何を言うとするんやお前は」

何だよ、サンシャインって。そんな挨拶の仕方があるかってんだ。

「いやあ、ありがとうございますをどこまで崩して気づかれないかどうかの実験をですな」

「せめて勤務中は真面目にしてくれよ、頼むから」

「昨日は有明海って言ってもスルーされたんですよ」

「んなこと、言ってるのは、この口か、コラ!!」

「い、いひやい!いつふーふあん、いひやいひひやい!」

他の客がないからガツンと言ってやるとにする。せめて挨拶くらいはできる子に育ててやるのが先輩としての義務だ。今後挨拶で人生が左右するって言うてもいいくらい大切だからな。

ていうか、結構モチモチしてるな。

「お前、最近太った?」

「いやいや、それはないですよ。ひーちゃんにカロリーを送ってるので」

「も、モカ!？」

「うお?! いらつしやい!？」

気がつけばレジに常連さんがいつものお菓子を持ってやって来てた。ていうか、いつ店に入ったんだ?

「あ、ひーちゃんだ。いらつしやうい」

「もー! 何でモカはそう言うこと言うかなー!? 一瞬ドキツとしちゃったし、店員さんにも話しちゃうし!」

「今のモカちゃんもこの店員さんだよ」

なんだ、青葉の知り合いだったのか。羽丘の制服着てるからまあ、不思議ではないか。

えっと、エクレアが230円、フルーツタルトが217円。

「そうだけど、そうなんだけどツ!!」

「いつつーさんいつつーさん、ひーちゃんと一体どういう関係なの?」

「…… よくレジで顔合わすだけだよ、三点で合計748円になります」

「わわ、すみません! ちょっと待ってください!」

「いや、別に焦らなくても大丈夫ツスよ。なんか、いつも青葉に振り回されてる感じですかね?」

「い、いえいえ！そんなことは！」

「そうだよひーちゃん、正直に言っちゃいなよ〜」

「ややこしい！」

ダメだ、完全に青葉のペースだ。

「せ、千円から」

「…… お客さん、これ五千円札です」

※

あのお客さんはどうやら青葉のバンドメンバーらしい。いつも苦労してるみたいで、客もいなかったので愚痴られた。

青葉も適当に相槌をくりかえすということをあれから十五分くらいはそんな感じだった。

ついでに八月にやるミニライブのチケットまでいただいてしまった。

バンド名はAfterglow、会場はCIRCLEでやるみたいだ。

「夕影、鮮明になって」というイベントの名目でやるらしい。まりなにまた色々聞いてみよう。

※

その日の夜勤、海輝とシフトが被ってしまったことに後悔しながら、長い夜を過ごした。

5. あるドラマーの天体観測

「あれ、先輩？」

「え、もしかして北沢君？」

「はい！お久しぶりです！」

まさかの北沢君もバイトとして来てたよ！

「本当に久しぶりだな！店の方はいいのか？」

「ええ、休みなので」

休みなのに日雇いのバイトに来るなんて、相変わらず真面目な後輩だ。

商店街の北沢精肉店の跡取りとして高卒してから両親の手伝いしていると聞いてる。

最近あの店行けてないからなあ、また行ってみるか。

「妹さんは元気か？」

「はぐみは元気ですよ、ていうか元気すぎて困ってます」

「ははは、だろうな！たまに街を走り回ってるのを見かけるよ！」

と、そんな話をしてたら今回の企画の発案者さんから召集がかかった。

これから簡単なミーティングが始まるみたいだな。必要なのは、ここと、ここ。あとは、ここか。

他はまあ、適当に目を通してあげればいいだろう。

「——以上です。それでは、本日はよろしくお願ひします！」

※

バスは夕方出発するみたいだ。

俺たちバイトはちよつと早く集められてた。まあ、急なアクシデントとかあつても困るからそれが妥当なんだろうよ。

バスは二台、そのうち一台を俺ともう一人、普段は経営会社に勤めてる森口さんと一緒にすることになった。

さて、そろそろ集合時間になる頃だ。

バスの方もやってくるだろう、集まった人たちが迷わないように俺たちが目印にならなきゃいけない。

そんなわけで、俺と森口さんで一号車が停車する予定の場所へ行く。そんな遠くじゃないけどね。

お、集まつてる集まつてる。親子から青春を謳歌してる若者、ご老人まで老若男女問

わずって感じだな。

——さて、ものすごい見覚えのある人影に遭遇したんだが、どうやり過ぎそうかな？

「あ、あんたは！モ、モカのことを誑かした男!？」

「誤解を招く発言はお止めくださいますか、お客様」

※

その後、森口さんに白い目で見られたが何とか誤解は解けた。多分。

青葉と同じバンドメンバーの美竹、羽沢。そして、この二人とは違うバンドグループっていう戸山とLINEアカウントを交換する羽目になった。

何なの、最近俺と会うJKは全員バンドをしてなきやいけないって決まりでもあるわけ？

それで、何故かこの三人が俺の近くの席を選んで座ってきたんだが、なんで？

「本当にすみません！蘭ちゃんが、なんか、本当に、変なこと言っちゃって!」

「いいんだ羽沢。どうせ人の出会いは一期一会。ここにいる方々と次会うかすらわかんないからな」

「で、でも」

「いいってつぐみ、私の誤解だし」

それにしても、正反対だなこの二人。ていうか美竹は服装でここまで印象が変わるんだな。この間会った時は和服だったけど、今日は黒ジャケットにTシャツだからバンドしてるって言われても違和感はない。

青葉ともまた違う感じだし、この前のお客さんみたいにこの二人も振り回されてるの
だろうか？

「それよりもさ、楽しみだね！流星群！」

「そうだね！誘ってくれてありがとね香澄ちゃん！」

「いいよいいよ！私も人がいなくて探してたところだったし！あ、五葉さんってお幾つ
なんですか!？」

「二十歳」

「え？」

「え？」

「え……」

え？ちよつと待って、何でそんな反応なの？

特に美竹、何その顔。

「……すみません、私たちの一つ上くらいかと」

「おいコラ、俺一応大学生だからな」

失礼な奴らだな、俺がそんなにクソガキに見えたのかよ。

まったく、どういう育ち方したんだかな。

「五葉君、仕事中だよ」

「あ、すみません」

※

「どうちゃーく！」

「…… はいはい、順路通りに行くので私の話をしっかり聞いてくだサーイ」

「はーい！あ、すごい空が綺麗！」

もう聞いてないよ、この子！

ちよつと自由すぎないか？青葉とはまた違ったマイペースさを持つてるみたいだな、バンドメンバーもさぞ苦労していることだろう。

「ちよ、香澄」

「いいよ、俺が何とかしとくから」

ガキの暴走を見守って止めるのも俺の仕事だ。ここは森口さんと協力して何とか乗り越えたいが、あの人はあの人であつちで精一杯みたいだな。

たしか、この後簡単に夕食を食べに行くんだっただな。そう、BBQだ。

「美竹と羽沢もあっちに行っておけ、戸山は必ず連れて帰るから」

「五葉さん、本当にすみません」

「なんでつぐみが謝るのさ」

「そうだよ、気にすんなって」

なんか、羽沢は謝ってばっかだな。これがこの子の平常運転なのだろう。

結構苦労してきたに違いない。

「え、えと、それもあるんですけど、モカちゃんも普段迷惑かけてそうなので、そのことについても」

「お前は保護者か」

その後、俺が戸山を捕まえたのは二十分経ってからのことだった。

※

北沢君のご好意で、店のお肉を使わせてもらえることになった。

いや、北沢精肉店ってたしかコロツケがメインじゃなかったっけ？

「いやあ、最近色んな肉を入荷してバリエーション広げてるんですよ！うち」

「やっぱり経営厳しいのか？」

「厳しかったらそんなことしてる余裕ありませんよ、はぐみの友達のところって子が来てくれるようになってから売り上げもウハウハですよ」

「……何者なの、その子？」

※

さて、いよいよ星を見る時間になった。我々スタッフ一同はビール片手にツアー参加者と一緒に座ってる。

まあ、俺はその場にはいないんだけどね。チーフが俺を戸山達の保護者として認識したせいであいつらの面倒見ることになった。

なんでも、あいつ商店街でも明るく活発で何をしてくすかわからない子として有名な森口さんは近所の人じゃやないらしいから知らないみたいだけど。

それで、だ。なんか増えてるんだけど……

「うん、やっぱり山の空気っていいわね！久しぶりに来たけど、来る回数を増やそうかしら」

「あはは、やっぱりこころちゃんって面白い！香澄ちゃんもキラッとしてるし、るるんって感じー！」

……ホント、どうしてこうなったの？

※

増えたJK、金髪は弦巻こころ、薄い緑に近い青髪は氷川日菜と名乗った。

「ていうか、弦巻って、あの弦巻財閥のご令嬢さん？」

「ん？それはどういう意味かしら？」

「あ、いや、なんでもない」

なるほど、北沢君の言ってたところって多分この子だ。そりゃ売り上げウハウハになってるだろうな。

「羽沢、これツアーに合流できると思うか？」

「…… ちょっと自信ないです」

「だよな」

そんな気はしてた、とりあえず電波は辛うじて飛ばせるからチーフに連絡入れておこう。

なんかもう帰ってこなくてもいいよみたいな雰囲気だったけど、あ、北沢君にも一応連絡しておこう。

戸山と氷川は何か気が合ったらしく、さつきからずっと擬音話をしてる、なんであれで会話できてるんだろ？俺も結構使う方だと思ってたけど、あれには負ける。

「そういえば、五葉さんって何か楽器とかやってました？」

「なんで？」

「いえ、なんとなく、バンドしてそうな雰囲気というか、小さい頃に見たことがある気がする」

「…… そっか」

まあ、でもそっか。あり得ない話じゃないか。

「一応ドラムやってた、中学の時だけだな」

「ドラム……」

「まあ、星の綺麗さの感傷に浸ったおっさんの独り言だと思って聞いてくれたらいいんだけど、その頃は——」

「五葉さん五葉さん！これからこころちゃんの別荘に行くんですけど、行きませんか!? あ、蘭ちゃんもつぐみちゃんも皆で！」

「——だー！なんでこのタイミングで来るんだよ、このヤロー！」

その後、俺は有無を言う暇もなく黒服にサングラスを掛けた方々に連行されることになった。

※

別荘に着いた方がいいが、少し夜風に吹かれて星を見てたかったので中には入らなかった。

黒服の人がビールと煙草を持ってきてくれたからもらった、気が利きすぎる。

「煙草、あんまり体によくないよ」

「俺の人生だ、後悔はしねえよ氷川」

「あはは、やっぱり五葉さんって面白いな！ていうか氷川ってなんか慣れないから日菜でいいよ！」

「はいはい」

……日菜っていうと、どうしても別のヒナを連想しちゃうけど別人だろうな。世界ってのはそんな狭くない。

「日菜はいいのか、戸山達と騒がなくて」

「ちよつと疲れちゃったからね」

「そっか」

「ねえ、煙草ってどんな感じなの？」

「おいおい、やらねえぞ」

「いらないよ、体に悪いし！それなのに皆どうして吸いたがるのかな」って思ってるほど、最もな疑問だな。

「簡単な話さ、吸いたいから吸うんだ」

「体に悪いのにな？」

「そう、やりたいからやるんだ。それはなんでも一緒だ、リスクを恐れてたら何もできないだろ？」

「……ふふ、やっぱり五葉さんってよくわかんなくて面白い」

「どういう意味だコラ」

自分で言ってもわからなくなったのは否定しないが、他人からストレートに言われるとグサつとくるな。

「なんか、お前とは気が合わない気がするよ」

「ええ、私は五葉さんと話すの楽しいんだけどなあ」

「そっか」

「ねえねえ、もっと色んな話聞かせてよ！どこの大学行ってるの!？」

「華丘」

「あ、結構近所なんだ。東大とか京大とか行ってたらビビツときたのに」

「あんな頭のおかしい所に行く気にならねえよ、遠いし」

「そうなの？行こうと思えば行けたんじゃないの？」

「まあな」

「でも、行かなかった」

「ピンとこなかったからな」

まあ、正直華丘も微妙くさいけどな。

「ふーん」

「日菜って高校生か？」

「そうだよー、高二」

「大学ってのは偏差値が全てじゃねえ、入ってそれから何をやるかが大切だ、そいつを覚えてとけ」

「…… お、おお！なんかすごいババーンってしてるアドバイス！お姉ちゃんにも聞かせてあげたいな！」

「ん、姉貴がいんのか？」

「うん、双子で同じ年だけどね！」

「へー」

ということはその人も高二かあ。

日菜はたしかに姉というより妹って感じだな、なんか、蜜柑と話してる時と似てる気がする。

そういえば蜜柑のやつも今井も高二だったな。

「五葉さんは兄弟いないの？」

「ん、姉と弟、あと日菜と同年の妹がいる」

「あれ？それってもしかして蜜柑ちゃん？」

「うわー、世間って狭」

※

「五葉様、お煙草の追加はいかがなされますか？」

「じゃあ、あと二箱くらい。銘柄は何でもいい」

「承知しました」

「……もしかしなくても、弦巻ってあの弦巻家のことだよな。確認だけど」

「ええ、我々はこちらお嬢様のボディガードにございます」

「ご苦労様です」

「いえいえ」

さつきまで曇ってたけど、無事晴れてくれたみたいだな。

黒服の人が音もなく消えた、忍者なのかあの人たち。

さて、戸山達の部屋にいるのはいいけど皆眠そうだな。もうすぐいい時間帯だけど、これは起こしていいものかな。

トイレに行っていた美竹が戻ってきた。

「おう」

「五葉さん、さっきの話の続き聞かせてもらってもいいですか？」

「……いいけど、面白くねえぞ」

「それでも聞きたいんです。あなたほどのドラマーが何故、今は活動をしていないのか」

「……お前、知っていたのか」

「いえ、さっき黒服の人たちに頼んでライブ映像を見させてもらいました」

「……優秀すぎない、あの人たち？」

俺がライブした時の映像なんて、身内ですら持つてないのに何で持つてるんだか。

『Camereon』の曲は何度か練習で演奏させてもらったので、存在は知ってました」

「……そっか、CDは残ってたか」

「……つたく、モツピーの奴め。あの時に作ったやつもこの調子だと回収してないんだろうな。」

「まあ、いいか。簡単に言えば方向性の違い、よくあるパターンさ」

「……本当にそれだけなんですか？」

「ああ、特に面白いことは何も無い」

あとは俺個人のことになってくる。姉ちゃんのこともあるし、何よりめんどくさい。

「それで、なんでこんな話を？」

「…… いえ、単純な興味です」

——嘘、だな。

「そうか」

「だけど、あえて言及はしない。したところで何も無い。

それに、もうすぐ流星群が一番見える時間だ。」

「美竹、皆を起こすの手伝ってくれ。そろそろ時間だ」

「あ、はい」

「まったく、急にしおらしくなりやがって。数時間前とは大違いじゃねえかよ。」

「まったく、お前もどうせ青葉に振り回されてるんだろ？」

「…… モカは、皆を振り回してます」

「…… そっか」

「何とも言えない気持ちになった。」

※

「日を跨いで十二時半、俺は黒服の人たち（こんな時間まで本当にお疲れ様です）に囲

まれて移動を始めた、皆気づいてないけど。

「すごい！キラキラが、ときめきが止まらない!!ギター弾きたい！」

「やめろおー！」

アホかこいつはー！

「そうだよ香澄ちゃん！いくらなんでも、こんな時間にやるのはマズイよ！」

「でも、香澄の言うことも一理あるわ！そうだ、ここに特設ステージを建てましょう！」

「そういうことじゃねーよ！」

「あははははは！五葉さんのツツコミってドドーンって感じだね、面白い！」

こいつら自由か！

まったく、今まで会ってきた奴らが可愛く見えるくらいだぜ、制御できねえ！

「まったく、皆流星群終わっちゃうよ」

「あ！そうだった！」

ふう、とりあえずは落ち着いたか。

流星群か。初めて生で見ただけど、結構綺麗だな。まりなと二人で見れる日が来たらま

た見たいな。

「うし、せつかくだし記念撮影でもするか！流星群が終わる前に！」

「あ、いいですねそれ！」

「でも、写るかな？」

「それなら心配ないわ！私が夜景でも写るスゴイカメラを持ってきたから！」

というわけで、黒スーツの人にカメラマンを頼んで流星群を背景に写真を撮ってもらった。

戸山と弦巻が真ん中、右隣に日菜、左隣に美竹と羽沢、そして俺がその後ろって構図だ。ていうか日菜、俺の腕を掴まないでいただきたい。

「すみませんね」

「いえ、仕事ですので」

黒スーツさんにお礼を言ったら言葉を残してどこかへ消えて行った。あの人ら本当に忍者なんじゃないのかな、なんて思えてくる。

「ふあ、なんだか眠くなってきた..」

「私も」

「えー!?私は何か元気出てきたんだけど！」

「俺ももうなんか色々疲れたわ」

あ、そうだ。これ帰りどうするんだろ？考えてなかったな。

「五葉さん」

「ん？」

「——夏休みに、私達 Afterglowのミニライブがあるんですけど、来ていただいてもいいですか？」

「……それ、青葉にも言われてチケットももう貰ったぞ」

「え!?!」

美竹は恥ずかしそうにしてそっぽ向いた。

6. ある妹の訪問

第一話、つまりゴールデンウィーク以降初めて休憩室に俺、青葉、今井、変態の四人が揃うことになった。

——最悪だ。

「……青葉、今井、悪いが帰っていいかな？」

「だーめ！喫煙所までなら許す！」

「ありがとう青葉、ちよつと行ってくる」

「君禎あ!?!そんな俺と一緒にいるのが嫌なの!?!ねえ、ちよ、やめ、灰皿で殴らないで！」

「まあまあ」

全く、今日もないと思ってたのになんているんだよ、コンチクショウめ。

今日だけで一箱消費しそうだ、新しいの買い足しとかないな。

「で、お前はいつになったら解雇になるんだ？」

「嫌がりすぎじゃない!?!」

「生憎俺は好き好んで脱いだ制服の匂い嗅がれてそれをもう一度着たいってほどアブ

ノーマルじゃないんでね！」

「そ、そんなこと言うなって！君禎の制服の匂いは煙草の匂いもあるけど、最近暑くなってきたし汗から出る塩分の匂いと店の匂いがいい具合にマッチしてて、ニコチンの度合いによって何本吸ったかもわかるんだよ！ちなみに今日ここに来てから君禎は十三本消費しただろ！」

「正解だよ、本格的にキモいわ！」

あ、つい灰皿で後頭部思いつきり殴っちまった。まあ、いいか。

だってあの青葉もドン引きし始めたし。今井は苦笑いだけど、絶対内心引いてるな、うん。

「いっつーさん、これどうするの？」

「そうだな、粗大ゴミとして出したいけど店長の許可も欲しいところだ」

店長を味方につけちまえばこつちのもんだ、親族からの了承でことで罪は軽くなるはず。

さて、あいつも倒れたことだしちよつと吸いに行くか。戻ってきて意識が戻ってるなんてことは嫌だけど、吸いたいものは吸いたいんだから仕方なし。

「あ、君禎おかえりー」

「起きたんなら、さっさとレジに戻れ！」

※

「ねえ、いつつーさん。どうやってびやくさんと知り合ったの？」

「んだよ、藪から棒に」

「いやあ、お二人の馴れ初めがモカちゃん的にとつても気になるというか何というか」

「気持ち悪い言い方すんなよ、馴れ初めとか」

ヤツバ、鳥肌立ってきた。

「すまぬすまぬ」

「まあ、去年大学で偶然会っただけだよ、そつからは腐れ縁というか何ていうか、な——

」

※

一年前。

華丘大学の食堂にいた時だったな。

「なあ！お前さっきの講義出てただろ！あれ、あの、あれだ！」

「どれだよ」

「あれあれ！片センのやつ！ノート写させてくれ、頼む！」

「嫌だよ」

「頼むよ！また単位落として留年しちまう！学費で一件家が建ちちまうよ！」

「あんた先輩かよ!?!」

まあ、結局あいつは留年して俺と同学年になったんだがな。

※

「まあ、こんな感じよ」

「全然エモくないね」

※

休憩が終わり、在庫確認の仕事をするようになった。現在レジは今井と川島君がやってくれてる。

ていうか青葉のやつは一体いつまで休憩してるつもりなんだろ、今日ずっと休憩室にいる気がするが、気のせいだろうか。

「よ、頑張ってるか若人よ」

「あ、店長。お疲れ様です」

やっと思ってきたのか。

「そうだ、表に出してるアイスと冷凍庫の中にあるもの合わせてもそろそろ切れそうです」

「やつぱりかあ、最近暑いし賄いでも配っちゃまったからなあ。あとどんくらい保ちそう
だ？」

「三日保てばいい方かと」

「じゃあ、多めに注文しとくか。他には？」

「今チエツク中です」

「オツケーオツケー、じゃあ俺は他の様子確認してくるわ」

「ウイッス」

うん、息子とは違って人間が出来てらっしやる。何であの人の息子があんな匂いフェチのチャライ変態になっちゃったのか理解に苦しむぜ。

あ、割り箸と紙皿もそろそろヤバイな。飲み物類の減りも激しい、もう七月に入ったからなあ。

夏かあ、この前進級したばっかなのに時間が経つてのは早いもんだなあ。

「あ、五葉さん！店長が在庫表を見せてくれと」

「わかった、もうすぐ終わるって伝えといてくれ」

「はい！」

さて、もう少し頑張りますか。

※

ピンポーン。

勤務が終わり、家に帰って寝てしまったみたいだ。ていうか誰だ、今何時だ？

朝の九時。

もうそんな時間か、上がってからの記憶があやふやだな。つたく、時間帯的に集金か？

ピンポーン。

「つたく、ハイハイー！」

人の睡眠時間奪いやがって、誰か知らねえが許さないからな！

寝汗で湿ってる寝巻きから着替えんのも面倒だ、そのまま出よう。

「おつす兄貴！元氣してるー？」

——隣から苦情がきてもおかしくない強さで扉を思いつきり閉めた。

さて、眠いし寝るかあ。

※

「って、ちよつと待てー！兄貴!?今の兄貴だろ、ウチだよウチ！ユーアーリトルシスターの蜜柑だよ!!悲しいよ、せっかく久々に顔見せたのに鍵まで閉めるとか、てか固!!なんだよこの扉、ガチャンって音までしないとかどういふことだよ!!びくともしないし、え、何?これ変態対策なの!?兄貴変態に追い回されてんの!?おい、大丈夫なのかよ、サツに通報とかしなくていいのか!?一大事だ、姉貴にも報告しないと、こりや家族会議ものだぜ!第1453回五葉家緊急会議を一週間ぶりに始めなきやいけねえ、事態——」

「やかましいわ!!近所迷惑ってのがわかんねーのか!?」

「い!ば!」

※

「てなわけで、久しぶりツス兄貴。デコ痛い:」

「ったく、苦情来たらお前が全部対処しろよ」

「ええ!」

「ったく、朝っぱらから人の部屋の前で騒ぎやがって。うちの防音設備ガバガバなんだから勘弁してほしい。」

「……ていうか、ちよつと待て。」

「なんで今井と日菜までいるんだ?」

「いや、あはは」

「そんなことどうでもいいじゃん！ やっぱり蜜柑ちゃんのお兄さんだったんだ」

「そう言ったろ」

ダメだ、頭が痛い。蜜柑だけでも大変だったのに、日菜までいるとか。

「あれ？ ていうかお前ら学校は？」

「今日は日曜だよ」

「あ、そっか」

ダメだ、本格的にボケてきた。そっか、高校つてたしか土日は基本休みだったんだな。

「で、何の用だよ蜜柑」

「…… いやあ、兄貴が餓死してないか心配で」

「相変わらずの心配性だな、お前は。俺よりもあのDQNの面倒見てやってくれよ」

「いや、君邦はもう生理的に受け付けられないっていうか」

「仮にもお前の兄貴だからな」

君邦よ、お前とうとう妹にも見放されたぞ。

「つーか、何メツシユ入れちゃってんだよ！ 髪が傷むだろ！」

「兄貴にだけは言われたくない！」

元々灰色に近い黒髪で結構綺麗だったのに、毛先を緑にしちやってるよこの愚妹。

兄貴は悲しいぞ。

「あははははは、仲良いんだね！」

「ていうか、今更ながらお前らどういう繋がりなんだよ？高校は同じって聞いたけど」

「ああ、それは簡単です。私と日菜がクラスメイトで私と蜜柑はダンス部が一緒なんで」

「それでウチと日菜ちゃんは学年トップ争いをしてる仲ツス」

「思ったよりも面倒くさい関係だな」

全員クラスメイト、もしくは羽丘の生徒、それじゃダメなのか？

ていうか、暑い。こいつらが来たせいで室温上がって汗がヤバイわ。

「ちよつと俺シャワー浴びてくるわ、さつき起きたとこだし」

「あ、五葉さん朝ごはんまだですよ？作るときですよ」

「悪いな今井、冷蔵庫何もねーけど適当に使つといて。あと蜜柑、覗くなよ」

「は？」

「なんもねー」

※

いつもの癖でパンツとズボンだけの状態で居間に戻ったら、蜜柑に殴られた。そういやコイツらいたんだった、日菜は顔逸らしてる。こいつ意外に純情なのか？

「さて、できましたよー！ついでに皆の分も作った！」

「わー、リサちゃんさすがー！」

「やっぱリサ姉と呼ばれるだけあるね！」

何だろ、前々から思ってたんだけど今井ってかなり家庭的なんだよな、ガサツを二乗したような蜜柑と違って。

「じゃあ、いただきます」

「いただきますーすー！」

あ、この卵焼き美味しい！

ていうかりモコンリモコン、あつたつた。朝はニュースを観るのがいいよね、もうほぼ昼だけ。

「あ、Marmalade解散するんだ。結構好きだったんだけどなあ」

「え、五葉さんアイドルとか興味あったの？なんか意外」

「兄貴って昔から芸能界好きだもんね」

「それでもねえよ、点けたらやってるから観てるだけだよ」

でも、実際Marmaladeはアイドルの枠を超えて色んなことをやってたからなあ、あ、TOKIOほどじゃないけど。

「ねえ、五葉さん、パスパレって聞いたことない？」

「ん？最近頑張ってるアイドルだよな、たしか、何ヶ月か前に口パク事件があつて活動を自粛してた」

「そうそう、私つてそのメンバーの一人なんだけど知ってた？」

「うん」

「反応うすー!?!」

いや、初めて会つた時からそんな気はしてたけど、聞くタイミングなかったからな。

「ていうかなんで蜜柑ちゃんのリアクションの方が大きいのか？」

「いや、ウチは結構驚いたから、兄貴もウチと同じで単純な馬鹿だから反応は同じだろうと」

「おいコラ、それはどういう意味だ？」

※

「それじゃおっじやましましたー!」

「また定期的に来るわー、餓死すんなよ」

「またねー!」

「おーう」

嵐は去った。

今井は買い物、日菜はスタジオに練習、蜜柑は多分帰った。

さて、もうお昼の時間になっちまったけど休日を過ごしますか。
とりあえずログインしてログボ貰っておこう。

7. あるバンドのライブ

八月某日。

いやあ、ついにこの日がやってきたぜ。青葉、お前の代わりに入ったバイトのシフトの借りは返してもらおうからな！

しかも差し入れまで頼みやがって、あの後輩は本当に隙がないっつーか、ちゃっかりしてるっついうるか。

「あ、君禎！」

「ようまりな！これ青葉達の所に届けてもらっていいか？」

「あ、山吹ベーカーリーの！しかもすごい量、差し入れ？」

「パシリだ」

※

クラブハウスCiRCLE主催、Afterglowのミニライブ「夕影、鮮明になつて」の開催日ってわけで、すごいお祭り騒ぎだな、おい。

おかしくない？まりなの話だとオーナーさんはこういうこと手抜かない人らしいけど、それでもグッズまで販売してるのはおかしいと思う。

缶バッチに、タオルにTシャツ、さらにはチョコレートときたか。

タオルだけ買っておくか、ロゴデザインまできっちりしてやがる。これ一体経費どんぐらい掛けてるんだ？

ていうか、人こんなに入るのか？ざつと見た感じ百は普通に超えてるぞ、おかしいよね？

ガルジャムに出てから著名になったらしいけど、それでもこんなに人が集まるものなのか。当日券売り切れてるし。セトリ見た感じ、カバーとオリジナル含めて十曲はある。

……これ、普通にライブだよね？

「あれ？五葉さん、やつほー！」

「ん、宇田川？」

こんなクソ暑い中でもいつものジャラジャラゴスゴスした服を着てる中学生は宇田川しかない。

「お前もライブに？」

「そうそう！世界一のドラマーのお姉ちゃんが出るから見に来ない！」

「え、お前の姉貴もバンドやってたの？」

「ふっふっふっ、びっくりした？ねえ、びっくりしたでしょ？」

「結構びっくりした、しかもドラムか」

「そうだよ！あこもお姉ちゃんみたいに格好良くなりたくって！」

なるほど、かっこいい系なのか。こいつのかっこいいはあまり当てにならないけど。

「しゃーねえ、ライブまで時間あるし何か食うか。奢るわ」

「え、いいの!?!」

「ああ、今日は気持ちがあがってんだ。何食いたい？」

「商店街のクレープ！」

「商店街まで行く時間ねえよ！」

※

「……まさか、お前がRoseliaのドラマーだったとはな」

「あれ、あこ言っただけじゃなかったっけ？」

「初耳だよ」

ホント、俺の周りはどうしてこうバンドしてる奴ばっかなんだろうな。

姉妹揃ってドラマーか、家とかで練習する時近所迷惑になりそうだな。

ていうかなんでクレープ屋ここまで来て出店してたんだろ。もうびっくりだよ。しかもTシャツまで買っちゃってるし、出店条件みたいなものらしいけど、まあ、いいや。宇田川にも買ってやった。

「そういえば白金は一緒じゃないんだな」

「りんりんは人混みがダメだから今日は遠慮されちゃった、五葉さんがいてくれてボツチは回避できたけど！」

なるほどね、たしかにあいつはこういうところ苦手そうだな。

「さて、そろそろ中に行くか。トイレとか大丈夫か？」

「あーあここのTシャツに着替えてくる！」

「はいはい」

だからライブの時の女子トイレってあんなに混雑するんだな。

※

俺と宇田川のチケットは同じものであった。関係者席って、まあ、間違いじゃないけど位置はそこそこいい場所だった。

指定席ではなく自由席だったので早い者勝ちみたいだ。俺たちが行った時はまだそこまで人は来てなかったから席は選びたい放題だった。

ていうか、こんな大きなステージあったんだ。もうライブハウスの枠から大きく外れる気がする。デカすぎる。

もう小さめのコンサートステージって言っても過言じゃねえぞ。

「楽しみー！」

「だな、俺も久々だ」

姉ちゃんに連れられて行ってたのが懐かしい。そういえば、あの時の俺は今の宇田川くらしいの歳だったか。

もうそんなに時間が経ったんだな、俺がステージに立つことが、いや、ライブハウスに行くことがなくなってるから。

改めて本日のセットリストを確認してみる。オリジナルが五曲、カバーが六曲、計十一曲か。

「お隣よろしいですか？」

「あ、はい」

と、隣に来たのはこの場に似合わない和服を着た眼鏡のおっさんだった。しかもめっちゃ体格良いし、着物がよく似合ってるっしやる。

「お」

客席のライトが落ちた。

演奏が始まる直前ってことか、携帯の電源は切ったし、大丈夫だ。

——ステージ脇の照明が光り始めた。

そして、一気に弾けた。

ドンツツ!!と火炎放射による演出と共に演奏が始まった!

ヤバイ、演出にめっちゃ金掛けてる!

色んな意味で驚きながら一曲目【That is How I Roll】が始まった!

ベースとギターのスラップ、ドラムの激しいながらもリズムを整える慎重な叩き、全体を包むかのように安定させるキーボード。

そして、それら全てに調和させるかのようにステージに響き渡るボーカル、美竹蘭の女性にしては力強く、何かを訴えかけるような歌声。

ライブを楽しんで、観客の心をつかんでいる。それでいて、とても熱い!

心が震わされる、音色一つ一つが上手い具合に調和している。

メンバーの個性も、特に青葉!あいつのギターめっちゃ自由じゃねえか!それでいて違和感を感じさせない演奏、やりおる。

初っ端から、俺は素直にAfterglowが凄いと思った。

※

三曲目が終わり、休憩が挟まれた。

ここまでヒートアップする曲が連続して続いたためか、汗が凄い。

宇 田 川 な ん て ず っ と お 姉

ちやああああああああああああああああああああああん!! つて叫んでたし、その肺活量はどうなってるんだか。

「お一つどうですか？」

「あ、すみません」

隣の着物おじさんが水をくれた。そういえば水分補給のこと全然考えてなかったな。

「ライブハウス、よく来るんですか？」

「…… いえ、最近ちよつと興味が出てきただけです。娘が本気になって打ち込んでる

ものに、ね」

「なるほど、水ありがとうございます」

娘さんに苦労してるんだらうな。

「君は、よくライブハウスに？」

「いえ、中学以来です。バンドを組んでたので」

「……： そうですか、もしかして親の反対とかあったりしたんですか？」

「あ、いやそういうのはなくて、メンバー内の方向性の違いってやつで勝手に解散って形になりました」

まあ、リーダーがあんなこと言い出すもんだからな。俺は大丈夫だったけど、他の先輩方がなあ。猛反発してたし。

「……それはよかった、あなたはいいい親を持っている」

「そんな、別にそんな」

「私は娘の人生を縛りつけてる。美竹家の跡取りとして、後継者として育ててましたが、純粹に親と子としての時間を過ごせたかはわかりません。私の意志だけをぶつけ、あの子の願いを聞こうともしなかった」

「……それは、あなたが娘さんのことを想つてのことですよ。娘さんのことが嫌いな父親ならそんなこと、絶対しません」

間もなく次の曲が始まろうとして、イントロが聞こえてくる。

「娘さんのことを理解しようよ、ここに来てるのもその証拠ですよ。意見の食い違いなんて、人間なら当たり前です」

「……」

「今からでも遅くありません。娘さんと時間を作ることをおススメします」

「そう、します。娘と、蘭との時間を可能な限り」

「…… あれ？娘さんの名前蘭って、もしかして」

「ええ、ちょうど今ステージで歌ってるのがうちの娘の蘭ですよ」

マ、ジ、カ！

※

そのあとは何度かトークも挟みながら（主にドラムの宇田川の姉貴さんとよくコンビニに来てくれるベースのお客さんが喋ってた）【True color】に続き【Sca rlet Sky】のオリジナル二曲が最後の締めとして演奏された。

…… ていうか、あいつら演奏中に何か喋ってなかったか？お互いを励ますような、言葉を交わしてた気がする。

特に美竹、お前の声二重になって聞こえたぞ。

「くう！やっぱりお姉ちゃんカッコいい！そう思うでしょ、五葉さん！」

「いや、うちの蘭も負けてはいないぞ！どうだね、五葉君」

「どっちも、皆最高ツスよ！」

やっぱライブっていいな！心が熱くなるっていうか、感情が爆発しそうだし！

なんか美竹の親父さんとも仲良くなっちゃったし！

「次の曲で最後になります、この曲は私が、私たちが挫折しそうになった時に、まだバン

ド結成して間もないときに練習させてもらった曲のカバーになります」

ん、まだあるのか？セトリじや最後だったけど、サプライズ的なあれか！

「——聞いてください、ブレイブ・ハート」

「え？」

ブレイブ、ハート!?

——ッ!?

このギターの入り方、間違いないねえ！それに続くベースのスラップ、調和するかなようなキーボードの流れる音。

歌詞と同時に、ドラムが入る！

「——ッ！」

——この感覚、ああ、間違いない！

これは、俺の、俺たちの青春の一ページ、C a m e r e o Nの時に作った曲だ。

※

『どうだ君禎！イカスだろ、俺の相棒はよ！』

ベースとボーカル、さらにはキーボードまでやれたりリーダーの叶多先輩。

『先輩、僕ら最高のバンドグループですよね！』

ギター担当、そして皆のブレーキ役でもあった北沢君。

『そう緊張することないって、気楽にやっついこや』

リードギターに編曲、作詞作曲をしてくれてたムードメーカーのモツピー。

『やれやれ、僕の周りってどうしてこうも癖の強い人ばっか集まるんだらうな』

キーボードとドラムを担当してた紅一点だった満先輩。

あの頃の思い出が、美竹の歌声と共に蘇る。あいつらの言葉、いつからか食い違った歯車、順風満帆だったの思ってたのに半年くらいで解散したこと。

——そして、それが原因で姉ちゃんと叶多先輩が別れることになったこと。

「——ッ！」

そう、このキーボードの忙しき、激しく叩いてるようだけど曲全体の要と言ってもいいドラム。

そして、あの人が好きだったって理由で無駄に多いスラップ。譜面自体は基本に忠実だが、そこにアレンジを加えに加えた結果、うるさくて近所迷惑だと怒られた日々。

美竹の力強い歌声がよく合っている、マイクに打ち付ける感情の嵐、叫び響き渡るシャウト。

青葉のテクニクも中々なものだ、あのスラップの連続をこうも見事に再現するのは。それでいて、アレンジがあるも違和感がない。

あの、宇田川の姉貴のドラムも見事だ。俺もあそこまで楽しそうに叩けるかどうかと言われると、わからない。

あんなに、心に打ち付けるようなテクニクは俺にはできない。

「……！」

——ああ、もうこのフレーズ、か。

もうすぐ終わってしまうのか。俺たちの曲、いや、今この場においては完全にA f t e r g l o w のものだ。

俺たちが紡いだ青春協奏曲を、今は、今を青春するJK達によって紡がれる日がやって来るなんてな。

皆が知ったらどんな反応するんだろうな、いや、止そう。

最後のパートだ。ここはベースのソロから入るのが特徴だ。

それからギター、キーボードで上げてドラムでヒビカセル！

「、……………ッ!!」

——歓声が、会場の熱気が爆発した！

まさに、ファイバーだ！この一体感、これぞ、まさに、ライブ！バンド！

——俺は、この日を、このライブを忘れることはない！

美竹蘭、そしてA f t e r g l o w！俺の魂に火を焚き付けてくれたこと、後悔すん

じゃねえぞ！

「———ありがとうございます!!」

この時、青葉はウインクしてこっちに向けてピックを投げてきやがった。しかも俺がキャッチできる絶妙な角度で、やりおる。

※

「お疲れさん」

「お姉ちゃん！カッコよかったよー！」

「蘭、また腕を上げたな！」

「なんかすごい組み合わせ!?!」

「あ、いっつーさんやつほー。差し入れサンキューね」

「あこー来てたのか！ははっ！」

「…… お父さん、来ないでって言ったのに」

「まりなに言つて楽屋に案内してもらった。俺と一緒に宇田川と美竹の親父さんも一緒にだ。」

「あんたが、宇田川の姉貴さん？」

「そういう貴方が五葉さんですか、初めまして。いつもあこがお世話になってます」

「い、いえ」

ヤベ、マジでビジュアルいいなこの人。宇田川が世界一格好いいと言うのも頷け、
けど、世界一かはわからない。

「いつつーさん、ともちは高一でモカちゃん達と同じ年だよ」
「嘘だろ!?!」

「同じ年か一つ下くらいかと思ってた、最近の高校生パネエ！」

「よく間違えられますので、あと、モカもバイト先でお世話になってます」

「…… お、お気になさらず」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん！超超超カッコよかったよ！」

「ありがとな、あこー！」

—— ヤバイ、超常識人だ。

「ていうか、どうしてお父さんと五葉さんが一緒に?」

「客席で知り合ったんだ、五葉君とはいい酒が飲めそうだよ」

「…… あの堅物のお父さんがここまで気に入るなんて」

「あの時の店員さん！来てくれたんですね！」

「今更だな、お客さん。改めて俺は五葉、よろしく」

「上原ひまりです！Afterglowのベース担当、リーダーもしてます！」

「え、リーダーって美竹じゃなかったの？」

「ちーがーいーまーす!!」

「いつつーさんもひーちゃん弄りがなってますなあ、一級を差し上げましょう」
「モカ!!」

なるほど、前々から片鱗はあったが上原はいじられ役なのか。主に青葉の。

「お久しぶりです、五葉さん！」

「羽沢もお疲れ、相変わらず大変そうだな」

「あ、あははは」

羽沢はなんか、苦勞人って感じだな。勞いのなでなでだ。

「美竹、いや、蘭ちよつといいか？」

「はい?」

美竹だと、親父さんの方も反応しちやうからな。

「ラストの一曲にはやられたよ、よくあそこまで再現したな」

「いえ、五葉さん達には敵いませんよ。あれって五葉さんが中学の時に演奏した曲なん
でしょ?」

「まあ、他は高校生だったけどな」

俺と北沢君だけが中学生だったからな、あの頃は。

「ホント、凄かったよ。熱くなれたし、楽しかった」

「だってさ、よかったねモカ」

「ん？」

「へへへ、あの曲入れようって提案したの私なんだ。なんかいつつーさん最近元気なかつたし、私に何かできないかなって考えてて」

「……ッ」

青葉が恥ずかしそうにそう言った、普段こんな顔をしない青葉が。

俺が元気なかつた、そうだったのか？

なんかあんま自覚ないけど、他人にはそう見えたのかな？

「…… そんな風に見えた？」

もしかしたら、バイトの後輩達や店長達、今井や蜜柑、まりなにも心配かけてたかも
しれない。

「気落ちするようなことはなかったと思うけど、え、本当に心当たりがないぞ？」

「え、まさか勘違い？」

「ええええええええええええ!!」

「そんなのってアリ!？」

「ちよ、五葉さん!」

「うわー、薄情ですね店員さん」

「五葉さん…」

「あはは、大変みたいですね」

「五葉さん五葉さん、女の子泣かすなんてサイテーですよ！」

「五葉君、君がそんな人だとは思わなかったよ」

「君禎…」

「えーん」

「明らかな嘘泣きなのに、この仕打ち!？」

「ていうかまりな、いつの間にも!？」

「… あ、青葉、その」

「モカって呼んで」

「… モカ、なんかごめん」

「山吹ベーカーリーのパン十個で手を打ちましょう」

「さては狙ってたな!？」

「この日、俺の財布が恐ろしく軽くなったことは言うまでもあるまい。」

8. ある学生達の夏休み

午後までバイトがなく暇である、寝てようと思つたけどあまりの暑さに起きてしまったので仕方なく買い出しに出かけることにした。丁度塩とスポーツドリンクが減ってきたところだ。

いつものスーパーに行こうと歩いていたら俺の目の前に三毛猫が現れた。

「…… ミケ？」

「みやあ」

なんだろ、俺はこのミケに知り合いなんていないはずだ。

それなのに、このミケはまるで俺を待っていたののように俺のことをじつと見つめてくる。暑い。

…… 一体いつまでこうしてるつもりなんだろうか？それとも、これは我慢比べの類なのだろうか。

いくらバイトまで暇だからといって無駄な時間は過ぎたくない。ミケの意図がわからないからとりあえず近づいて愛でてみることにしよう。そうすることで無駄な時間も無駄ではなくなる。

逃げられた。

「クソ！」

「みやああ！」

付いて来い！そう言ってる気がしたから追いかけることにした。

いくら温厚で仏の五葉さんと言われてる俺でも怒るときは怒る。煙草足りない時とか、クレーマーが来た時とか、あの変態に絡まれた時とか！

駅を通り抜け、商店街を走り去り、公園を抜け、辿り着いたのは公園と路地の丁度境目に位置する小さな空き地だった。こんなところがあるなんて全然知らなかったな。

ドヤ顔をしているミケが可愛い、まりなほどじゃないけど。

辺りを見渡すと猫、猫、猫と7匹くらいの猫が群れをなしている。そんな中、先客がいたようで人間が二人。

……しかも、どっかで見たような、知ってるような知らないような……

「はう、こ、こ（こ）？こ（こ）が気持ちいいの？」

「あー！かわいいー！ー！匹くらいうちにお持ち帰りしちゃってもいいよね！いいよね！？」

「と、戸山さん！我慢しなさい、私だつてここに住みた、全員連れて帰りたいのですから！」

……アカン、普通に知り合いだ。

ミケよ、もしかしてあの二人を連れて帰って欲しくて俺をここまで連れてきたのかい？

二人の少女、片方は天体観測のバイトの時に見た戸山香澄、だな。ランダムスター背負ってるし。

んで、もう一人はあれだ、今井の幼馴染のユツキーナだ。一緒にいるのよく見るし家もご近所だから親と挨拶程度のコミュニケーションは取っている。

猫好き、だということは初耳だが普段の様子からは想像できんくらいの甘ったるい声を出してる。録音して今井に聞かせてやりたいくらいだ。

「あ、五葉さんだ！…こんにちはー！」

「ツツツ!!」

戸山が俺に気がついた。ユツキーナの身体がめっちゃ飛び上がった。何今の？

「……い、五葉、さん？」

「お、おお、よっ」

「……何か、見たかしら？」

「な、何かって？」

「何も、見てませんよね？」

「あ、はい。何も見てません」

頼むユツキーナ、その怒りと恍惚さと焦りが混じった顔をやめてくれ。怖いよ、親父さんと今井に何て言えばいいんだよ。

戸山も首を傾げてないで助けてくれ、肩が割れる。

「五葉さんと友希那先輩って知り合いだったんですか？」

「ええ、ご近所さんってだけよ」

「俺はお前ら二人が知り合いってことに驚きだよ」

「ええ!？」

しかもこんなモフモフの楽園で二人して猫ちゃん愛でてるなんてさ。

いつの間にかミケは俺の肩の上に乗ってるし、お前さつき俺から逃げたことは忘れな
いからな？

俺の肩の上は安くないぞ。

「……い、五葉さん」

「何？」

「そ、その、その子撫でてもいい、でしょう、か？」

「……何故俺に確認を取るんだ、普通に撫でればいいじゃん」

「で、でも」

ミケは俺の肩で気持ちよく欠伸をしてる、お前そこで寝るなよ。俺一応午後からバイトなんだからな、毛がついてたら落とすの大変なんだからな。

特にバイトの日には念入りにやらないといけないから大変なんだぞ。

「ていうか、お前らはここで何をしてるんだ？」

「夏休みだし、歩いてたら友希那先輩と会ってですね！」

「うんうん」

「友希那先輩がこの黒猫ちゃんを追いかけて、私が付いて行ったらここに辿り着きましたー！」

「そ、そうか」

なんだ、この猫ちゃん達は俺たちを呼び込んでどうするつもりなんだ？

ミケに尋ねてみるが、もう寝てやがるこいつ。

「…… ていうか、俺食料品買う予定だったんだ。そういうわけでそろそろ行くわ」

「せめて、そ、その子を置いていきなさい！さもなくば——」

「なんで俺が誘拐するみたいな流れになってるの!?! そういうノリはバンドメンバーの前でやれよ、ユツキーナ！」

「ユ、ユツキーナって呼ばないで！」

次からこいつのこと、ユツキーニヤって呼ぼうかな？

※

バイト先に到着したら、店長を筆頭に大慌てだった。一体何があったんだろうか？

「店長、今来ました」

「お、五葉君！助かった、とりあえず40秒で支度しな！」

「何のだよ!？」

※

準備を済ませて話を聞くには、今井が用事があつて遅れるらしい。ついでにあの変態もついに大学から呼び出されたわけであつて、今この場にいるのは俺と店長とモカの三人だけみたいだ。

もう、あと一時間もすれば今井含む何人かが来るらしい。

それまでのこの夏休み真つ只中夕方のコンビニを三人で回せと店長は言う。

中々無茶なことだ、店長は今も他から応援を呼んでいる。それ以外の事務作業もすべて引き受けた、あの人過労で倒れたりしないかな？

レジに俺とモカが立つしかない、客もそこそこ来てる。本当にここはコンビニなのかつてくらいの客数だ。

「いらっしやいませー！レジこちらご利用ください！」

「よ、弟よ！頑張つとるか？」

「このクソ忙しいときにしれつと並んでんじやねえよ姉ッ！！240円になります！」

「500円から！」

「せめて40円を出せ！！260円のお返しになります！ありがとうございます！お次

のお客様どうぞー！」

「あ、ひーちゃん！みんなもいらっしやうい！」

「ヤッホー！モカ！売り上げに貢献しに来たよー！」

「…… 五葉さん、本当にすみません！」

「…… まったく」

「ほら、ひまり！混んでるんだし早く行くぞ！モカも一応業務中なんだから！」

「せめて、二列に分かれて並んでくださいませんかね、お客様アアアア！！」

二時間後、客も減り今井達 came ことでようやく俺は一本吸うことができた。

うあー、生き返るわー。

「あ、いつつーさん」

「モカ、もう上がりか？」

「もうくたくたなので、今日はちよつとつぐりすぎましたので」

「…… つぐるって何？」

モカがその場で着替えようとしたのでとりあえず更衣室に追いやる。

そのままの流れで喫煙室に入って二本目に突入する。んー、今日で一箱使い切っちゃうかもな。

「そういえばいつつーさん」

「どうした？」

「次の日曜、時間あつたりします？」

「また、やまぶきベーカリーか？」

「さすがいつつーさん、わかつてらっしゃいますな」

「商店街前でいいか？」

「ですです」

そのままモカはメロンパンを食べながら帰って行った。ていうかどこから出してきたんだ？

休憩室でまりなとLINEしながら黄昏てると今井が休憩に来た。

「あ、ラッキー！五葉さん休憩時間まだあります!？」

「まだしばらくあるぞ、今は人も来てくれて安定してるし」

「つしやあ！お願いします、夏休みの課題手伝ってください!!」

「準備早えよ」

机に並べられたテキストと筆記用具の数々！断れない雰囲気を作るあたり、モカ並みにちやつかりしてやがる。

「……それで、どれかヤバいんだ？」

「えっと、数学がとりあえず一ページも手をつけれずにいるのでそれから」

「せめて少しはやつとけよ」

※

二日後、俺は宇田川と表札の掲げられた家の前にやつて来ている。

「……結構デカイな」

姉妹揃ってドラムやってるっていうから、スペースはあると思ってたが予想以上だ。

あのライブイベントの後、巴にブレイブ・ハートの叩き方で迷ったところがあると言われて、教えてほしいとも言われた。正直、何年もスランプがあるからむしろ教わることになっちまいそうだけど、あこも便乗してきたんだからどうしようもなくなった。

スタジオでもいいんじゃないかと案はあつたけど、あこの熱いプツシユによつて宇田川家でやることになった。

まず、インターホンを押して扉を開けた先にはいつものポーズを決めたあこが立っていた。

「…… 帰っていい?」

「拒否する!」

こいつ、本当に巴の看病なんてできたんだろうか。夏休み前に巴が熱出して倒れてあこが看病したって話を本人が武勇伝みたいに語るもんだから、あの時は相槌打って聞かなかったけど、信憑性が薄れてきた。

中に入るとどこかあこに似た雰囲気的女性が迎えてくれた、多分二人の母親だろう。

「お邪魔します」

「あらあらどうもどうも! いつも巴とあこがお世話になってます」

「いえいえ、そんな。うるさくしてしまうかもしれないのは申し訳ないです」

「いいんですよ、いつもあこは騒がしいから」

「お母さん!」

「それに比べて巴は、あの子もたまにうるさいのだけど落ち着いてますからね、本当に姉妹なのか未だに私疑ってますもの」

それでいいのか、宇田川母!?

たしかにあの二人本当に姉妹なのかかわからないところあるけど、実の親が笑顔でそれ言っちゃっていいのか!?

「まあまあ、ゆっくりしていつてくださいな」

「あ、はい」

「お母さん！あ、あことお姉ちゃん、ちゃんと姉妹だよね？ちゃんと血繋がってるよね
!？」

あこが落ち着くまで十分かった。

※

「あはは、すみませんね五葉さん。うちの母が」

「いや、俺はいいんだけど、あこが信じちゃったつてのはヤバイんじゃないの？」

「ね、ねえ、お姉ちゃん！確認するけど、あこ、お姉ちゃんとちゃんと姉妹だよね!？」

「ああ、当たり前だ！こんな可愛い妹あこ以外にいるものか!？」

「お姉ちゃあああああああああああああああああああああああああああああ
!!」

美しい姉妹愛も確認できたし、練習に入ろうか。

「ちなみに二人でセツシヨンとかしたことつてあるの？」

「ないですよ、近所迷惑になっちゃうのでさすがに自重してます」

「……なら尚のことスタジオでよくなかった？」

まあ、金もあまりなかったということにしておこう。宇田川家のリビング並みに広い

部屋にドラムセットが二つ並べられていた。ヤバイ、自宅にドラムセットがある。

「それで、巴はどこが疑問だったんだ？」

「入りだしのここなんですけど——」

「ああ、そこはだな、ここをこうして——」

「あ、なるほど！こんなやり方があるんですね！」

「基本をちよつと弄つただけだけだな、例えば——」

そういうえば、俺もあの頃はこんな風に我武者羅に叩き方を模索してたつけ。

メンバー内でも経験はかなり浅い方だったからなあ。

俺はかつての自分のスタイルを巴に説明しつつ、巴の技術も吸収する。

「ねえ、あこ一回だけでいいから五葉さんの叩いてるところ見てみたい！」

「え？」

やだ、恥ずかしい。

「お、いいなそれ！五葉さん！お願いします！」

「土下座はんな軽々しくするもんじゃねえ！」

「ねーえ！いいでしょー？」

「いててて、あこ、テメエ、腕掴むな！」

さすがドラマー！見た目華奢でキャピキャピのロリっ娘なのに腕の筋力半端ねえ！

数分後、俺が一度だけ叩き、それだけで終わらずに七曲もドラムソロの演奏をしたことは言うまでもあるまい。

※

週末、約束通りモカと例のやまぶきベーカリーの戦争に参戦するため商店街に来た。

「お待たせ〜」

「じゃあ、行くか。もう結構人来てるぜ」

これから向かうのは戦場だ、モカも表情を引き締めている。

これまででない真剣な顔つきだ、相変わらず頼りになる戦友だことで。

「じゃあ、もしはぐれるようなことがあったらB地区で落ち合うってことで」

「了解です」

「——いくぞ」

※

数分後、B地区ごと羽沢珈琲店でモカと合流しお互いに戦果を報告する。

「まず俺からだ、週末限定パン二つ、クロワッサン六つ、カレーパン一つにメロンパン一つだ」

「次私ね、限定パン三つ、メロンパン八つ、チョコココロネ四つ、クリームパン二つ、女の子一人」

「え、え、え？わ、私も報告するの、これ？」

「……誰？」

この子は一体何をしてるんだ？ていうか、モカは一体何をしたんだ??

「あ、初めまして！牛込りみって言います！チョコココロネを買いに求めやまぶきベーカリーに通いつめて早半年ちよつと、今回もチョコココロネを七つ購入させてもらいました！」

「同志よ！」

「え、え？」

ガシツ！とモカが一方的に握手をする。牛込困ってるじゃん、一回落ち着かせてやったらどうや。

「あ、モカちゃん達いらっしやい！」

そんでもって、またあのライブの後知ったことなんだけどここ、羽沢珈琲店はつぐみの実家らしい。

両親の経営してるカフェの一人娘、それで娘のつぐみも店番をすることがあるのかなとか。バイトも募集してるらしいし、コンビニが嫌になったらこつちで働くのもいい

かな？

「あ、つぐぐ、パン食べる？」

「あれ？つぐみ、この店って持ち込み……」

「あははは、本当ならダメなんだけど、ね」

「……：… うちの先輩が迷惑をおかけしてます」

いつの間にかモカと牛込はやまぶきベーカリーのチョコココロネについて語り合ってるし、焼き加減とかチョコのとりみとか、よくわかるなそんなの。

つぐみが若干困ったような表情浮かべてるよ、何？これって俺が悪いの？

「コーヒーを人数分頼む、俺が奢るよ」

「やったー、いつつーさん太っ腹く、でも奢るならパンも奢ってほしかったな」

「な、なんかすみません！私もパン買ってもらえたら嬉しいです！」

「お前から頭の中は幸せチョコココロネか!!？」

俺はコーヒーを飲んで、チョコココロネについて語り合う二人を置いて帰った。

9. ある大人達の集まり

蘭の親父さんこと、美竹さんに飲みに誘われた、多分蘭のことを愚痴られるんだろう
など勝手に思ってる。

そして、残念ながら今日はまりなど姉ちゃんを会わせる日でもある。

そしてさらに残念ながら、ユツキーナの親父さんとも遭遇してしまい、姉ちゃんが大
興奮してる。

俺の身にもなつてほしいものだ。

——面倒だ、三人を連れて美竹さんの飲みの誘いに乗ろう。
酒の席ではつちやけるとしよう。

※

居酒屋「スケキヨ」、そこが待ち合わせ場所だった。

花咲川からも羽丘からも離れた場所にあり、知る人ぞ知る店らしい。俺も今日ここに
来るまで知らなかった。

「できでさ、聞いてんの君禎あ!! この私を無視するつたあいい度胸じゃん!」

「はいはいはいはい、聞いてるよ聞いている。まりなと話は終わったのか?」

「とつくの昔に終わったつーの! 彼女のことばつかじゃなくて、少しは姉にも目移りしやがれ!」

「…………… まりな、話し聞いてやってくれないか?」

「まりなちゃんとはさつきいっぱいお話ししたから次は君禎に話聞いてもらうのー!」

「この姉めんどくせえ!!」

もうこの人既に酔ってんじゃねえかって勢いでベタバタしてきやがる!

五葉柚子、それが姉ちゃんの名前で現在音楽雑誌の記者として働いている。

「いやはや、まさか君のお姉さんがあの月刊ロックンロールの記者さんだったとはね」

「…………… 姉が迷惑かけております、湊さん」

「気にしなくていいよ、五葉さんの上司には私も世話になったからね」

湊さんはもう引退したけど、そこそこ有名なインディーズの歌手であった。

娘のユツキーナにもその才能は受け継がれてるようで「LOUDER」はそれこそ湊さんが最盛期の頃の楽曲でそれはそれはすごい迫力だ。俺も何度か聴かせてもらった、今ではRoseliaがカバーしてるらしい。

なんとも濃いメンツでの飲み会になりそうで騒がしいのが苦手な美竹さんには少し

申し訳ないけど、その分愚痴もいっぱい聞くことにしよう。

居酒屋「スケキヨ」の垂れ幕を潜り、美竹さんの名前を出すと店員さんが案内してくれた。どうやら個室のようだ、しかもそこそこ広い。

「お待たせしました、美竹さん」

「いや、私もさつき来たところだよ」

相変わらず和服の似合う人だ。

店の雰囲気もあつてか、この人だけタイムスリップしてきた人みたいに見える。

俺は美竹さんと向かい合うように座つて、左隣に湊さん、右隣にまりなということになった。美竹さんの隣でまりなの向かいには姉ちゃんも座つた。

「聞いていた通り、人が増えたようだね」

「なんか、すみません」

「いや、構わないよ。君と私の仲じゃないか」

美竹さん、ええ人や。でも、表情の変化がわかりにくいせいで声色で判断するしかない。

ちよつと目が怖かったりする。

「ふむ、ならこれを機に自己紹介をしておいた方がいいですか？」

「それもそうですね。あ、その前に何か頼んでおきましょう」

美竹さんと湊さんがメニュー表を広げ、酒の部分に目を移す。

すごいな、この二人雰囲気とか違うのに結構絵になる。共通点はガールズバンドのボーカルの父親同士ってことくらいだけだ。

「私たちも何か頼もうか、君禎」

「いいけど、あんま度数高いの飲むんじゃねえぞ」

その場の收拾だけじゃなくて、後始末とか連れて帰るのが大変だからな。

そんな感じで話していると前菜であるきんぴらごぼうのお浸しが人数分運ばれてきた。

「で、五葉君。実は、娘のことなんだが……」

「蘭とまた何かあったんですか？」

「……最近、洗濯物を分けてくれとうるさいんだ。色が移るからと」

「あんた、まさかその着物も一緒に洗ってるんじゃないでしょうね？」

※

飲み始めて十分が経った。

万が一を考えて俺は清酒を飲むだけにしている。本来であれば混ぜりたいところなんだが、店側に迷惑をかけてしまう気しかない。

例えば俺の隣、湊さんと向かいの美竹さんがいい例である。

「いいや、蘭の方が可愛いに決まっているツツツ!!」

「いや、うちの友希那が日本一、いや宇宙一だツツツ!!」

そう、向かいと隣の俺をそっちのけに娘自慢を始めたよこの親馬鹿二人。

しかも酒が入るたびにヒートアップしていくのがタチが悪い、さらに元々がどれだけ飲めるかの勝負だったからこそ尚タチが悪い。

「——知らないでしょうがね、湊さん！ 私の蘭はね、着物着るとすっごい美しいんですよ、あれこそが現代を生きる大和撫子!! 赤いメッシュも気にならないほど綺麗な黒髪にあの白い肌、全てが相まってあの紫の着物に映えるんですよ!! 蘭にはどうか美竹流の後継者となってもらいたい!!」

「——それは所詮は見た目の話でしょ、美竹さん！ うちの友希那はね、普段もキリツとしてて美しいのは当たり前として、優しく気遣いのできる子で猫を見たときのあの蕩けた表情とか本当に最高でね!! たまにドジなところもあって声も綺麗で歌姫と称されるだけのことはある!! LOUDERの高音が超綺麗で良かった!!」

「…… やりますね、湊さん」

「…… 美竹さんもね」

…… 正直、余所でやっていただききたい。もつと言うなら、本人たちの前でこそ、そ

の想いをぶつけてやってほしい。

「ですがね、蘭も健気でね——」

「それでしたら、友希那も友希那でそれはもう——」

正直今すぐ、この席から抜け出したい気分だが、そういうわけにもいかない。ていうかそうすることができない。

背中からまりながガツチリと俺の首をホールドしてるからだ。しかも芋焼酎瓶で飲んでるよ、俺の愛しの彼女。

「いいねえ君禎あー！ 愛されててさー！ 私なんて蜜柑だけじゃなくて、ついには君邦にまで邪険にされ始めてねー！」

「それは仕方ねえだろ、昔から邦は姉ちゃんのこと苦手だし」

「そういえば、私まだ君禎の弟さんと会ったことないなあ。どんな人？」

「DQN」

「まあ、パリピであることに間違いはない」

あまりあいつとまりなを会わせたくない、だから一度も二人が会う機会というものをわざと作ってない。

多分すれ違う程度じゃお互いに気がつかないだろうし、写真を見せたこともない。

「五葉君！」

「ぐえ!? 何すか、美竹さん!」

「蘭は可愛いだろツ!!」

「あんだ、本当に大丈夫か!」

普段の様子から想像できないくらい蘭をプッシュしてくるよ、この人!

案外これが素なのかもしれないけど、今日は湊さんもいるせいでいつも以上な気がする!

「ほら見ろ、美竹さん! 五葉君はうちの友希那の方が可愛いと思ってるみたいだぞ!」

「そんなことはない、彼は一言もそんなこと言っていない!!」

「返答に詰まったということとはそういうことなんだよ」

何か勝ち誇ったように隣で笑い出す湊さん、ヤバイ、こんな姿とてもじゃないがユツキーナに見せることできねえ!

「くそ、どっちなんだ五葉君! 君がいつまでも答えを出さないなら、君を美竹流の後継者として今からでも育てるぞツ!!」

「いや、意味わからねえよ!」

「——うちの子になりなさい!」

「なんでや!」

アカン、普段厳格で頼れる蘭の親父さんがついにつ壊れた!

こんな姿とてもじゃないが、蘭に見せること、できねえ!!

「いや、五葉君はうちの子になるんだ」

「張り合うな!」

クソ、こうなったのも俺がこのメンバーで居酒屋に行こうとした俺のめんどくささが原因!

蚊帳の外、いや、この場合は野次馬つて言う方が正しいか。姉ちゃんは面白そうにニヤニヤしてるし「妹がまた増えるのかー!」とかほざいてやがるよ。

まりなも酒のペース早くなってやがる、ヤバイ、自棄になってやがる!

「さあ、どっち!」

「あ、の、なあ!!」

ダンツツツ!と机を勢いよく叩いて立ち上がる、ここが個室で良かった!

「まりな、少しもらうぞで!」

「え、ちよ——」

まりなから芋焼酎を瓶ごと奪い、グイツと一気に飲む。

喉が焼けるような感覚? 知らん!

目の前がふらふらする? 気のせい!

まりなが心配そうにこつちを見てるけど、俺は止まらねえ。

この酔いどれ親父共の暴走を止める!!

「——俺にはまりながいるツツツ!!俺にとつてまりなこそ宇宙一可愛いマイスウィートエンジェルだ! 異論は認めねえツツツ!!」

頬が赤い? 酔ってんだよ!

※

夜の11時頃に解散となり、今回の飲み会の勝者は俺になった。

俺はまりなと一緒に下宿先へと戻っていた。

今日はまりなは泊まりに来るという話になってたから何の問題もない。

ちなみに姉ちゃん、湊さん、美竹さんは何故か二次会と称してカラオケに行ったらしい。

なんでも、二人の親父さんが決着をつけるんだとかなんとか。姉ちゃんは審判として向かった。

「まりな、大丈夫か? さっきからふらふらだけど、しんどいならタクシー呼ぼうか?」

「べ、別にだいひょうふだいひょうふ、距離も、そんなに、ないし」

「……リバーズだけはやめてくれよ」

意識はあるみたいだけど、朦朧つてところだな。急いだ方がよさそうだ。

俺もあの芋焼酎一気飲みが効いてるのか、結構しんどい。

まりなの手を引いてる状態だけど、俺が先に倒れる可能性もあるのか。

そう思っていたら、まりなが手を握り返してくれた。

いわゆる、世間一般で言う恋人つなぎって方法で。

「……君、禎、だいひょうふ？」

「……そんな状態のお前に心配されるほどヤバくねーよ、ばーか」

下宿先に辿り着いた頃には日は跨いでいた。

相変わらずめんどくさい鍵の施錠を寸分の狂いなく済ませ、まりなをとりあえずベツ

ドに寝かして冷房を付ける。

一人の時だと基本的に扇風機で凌ぐのだが、客が来てる時は別だ。特に恋人の場合

は、な。

「ふひ〜」

「少しは気分よくなったか？」

「たぶん」

さて、そろそろ一本吸いたいけど、まりながこんな状態では目を離そうにも離せない。

こんな状態のまりなを一人にしておきたくない。

「……シャワーどうする？」

「うー、先行ってー」

「なら、後でいいや」

まりなの側に腰掛ける、ベッドの上じゃなくて下に。

そうすることで振動による刺激を起こさないようにという俺の小さな気遣いだ。

「ねえ、君禎あ。今週末暇？」

「んー、暇だなあ」

バイトもないし、モカと牛込からの呼び出しもないし。

「じゃあ、さ。久々にデートにでも行かない？ ちよつと見に行きたい舞台があつて」

「わかった、金は下ろしておくよ」

今週末の予定が決まった。

そのことを伝えた終えたからかはわからないが、まりなが眠りについた。

規則正しい寝息が耳に響き、刺激される。

汗をかいていたので、羽織ってた上着を脱がせて俺はシャワーを浴びに行った。

※

その頃、あるカラオケの107号室。

「意外とやりますな、美竹さん！」

「湊さんもね！」

——レベルの高い、洋楽と演歌が激突し合っていた。

※

そして週末。

昨日のバイトでモカと今井に顔がニヤけてて気持ち悪いと指摘されたことはとりあえず置いておこう。

まあ、デートと言つても二人で出かけるだけなんだけどな。嬉しいことには嬉しいけど。

たしか、ここMarmaladeが解散ライブの会場になったホールだよな。

チケットも合ってるし、事前に調べてきたから場所もあつてるはずだ。

ていうか間違つてたらまりなと会えないで一日が終わってしまうしな。

「君禎〜！ お待たせ〜、待った〜？」

「二分くらい」

「それほとんど待つてないよね!？」

うん、いつも通りだ。

「そういえば、誰か知り合いが出てるって話だけど、誰なの？」

「あ、結局言わなかったんだっけ？」

「なんか当日までのお楽しみとか言ってはぐらかしたのは誰だよ」

まりなが酔い潰れていたってのもあったけど。

とりあえず唾えたタバコの煙を吐き出すため、まりなから顔を背ける。

「えつとね、うちの常連バンドである *Pastel*Palette* のベース担当の千聖ちゃんがマリー役で出るの」

「やっぱりそっち系列か」

なんとなくわかってたことだ、ていうかいつの間にか常連になってたんだろう。

パスパレといえば、日菜がいたんだよな。蜜柑が超絶絶賛してたっけ。

「ていうか役名とか言われてもわかんないし、俺はその千聖とは一度も会ったことがない。テレビで見たことあるだけだ」

白鷺千聖、名前と顔は有名だからな。

子役の頃から結構色んなところに出ていたし、俺が見てたドラマとか時代劇にもキャストとして出てた。

まさか、本物を舞台上で見られる日が来るなんてな思いもしなかったけど。

「まあ、そうだよな。うちによく来てくれるからそのうち会うんじゃない？」

「実際そうなりそうだから怖いよ」

「あ、あと建物内禁煙だからね！ 私が預かつといてあげる！」

「ちよ、んな殺生な!?!」

いくらなんでもそんな非常識なことしないよ！

ちやんと喫煙室で吸うし！だから返してください!!

※

舞台が終わった頃には俺はまりなの涙が驚きで収まるくらいに大号泣していた。しょうがねえじゃねえか、めっちゃ感動したんだからさ。

俺が家に帰って白鷺千聖にファンレターを書いたことは言うまでもあるまい。

10. ある秋の日々の日常

「いらつしやいませー」

「あ、今日のレジ五葉さんなんですな！よかったあ〜！」

いつも通り、いつものコンビニでレジを担当していると顔見知りの羽丘のJK、ひまりが相も変わらず籠を使うくらいのスーツ類を入れてやってきやがった。

「以前ダイエツトなるものをしてると聞いたんだが、幻聴だったか？」

「…… えー、プリンアラモード317kcalが二点、ブツシユドノエル415kcalが一点、それから」

「モカみたいなことしないでくれませんか!? 泣きますよ!!?」

「他のお客様に迷惑になる行為は慎んでください、お客様」

「はあ、ホントめっちゃ買いやがって商品一つ一つレジに通すアルバイトのこと考えろつての。」

「…… うう、でも、でももうすぐハロウィンだからそれまでに痩せないと、痩せて期間限定スイーツコンプリートしなきゃ」

「まだ一ヶ月先じゃねえか、イベントの方は始まつてるけどな」
「イベント？」

スマートフォン用アプリ「バンドリ！ガールズバンドパーティ！」にて「こころはいつもHalloween！」絶賛開催中！

「それで、こんなに食つて太らないとでも思つてるのか？」

「うぐ!? ひ、一人で食べるわけじゃないし！」

「そーいや、ひまり一人つて珍しいな。モカはともかく、他のメンバーはどうしたんだ？」

ひまりつて結構誰かと一緒にイメージがあるからなあ、一人だけつてのは想像できない。

まあ、現に今一人だけだけど。

「えつと、つぐは学園祭も近いので生徒会の方が忙しいみたいなんですよねえ」
「……道理で羽丘の奴らのシフトが消えたと思つたぜ」

モカはともかく、あの今井も数減つてるくらいだ。

「で、蘭と巴はなんかライブに観に行つたみたいです。沼津の方まで」

「ちよつと距離あるな」

まあ、明日は土日だから問題はないのか。

「ていうか、会計さっさとしてくれ！客並んでるわけじゃないけど、誤解されたら面倒だ」

「もういつそ誤解されちゃいます？」

「その笑い方やめろよ、気持ち悪い！ガキが色気づいてんじゃねえよ、つたく！合計3216kcalになります！」

「ぐは!？」

※

引き継ぎを終え、帰り道を歩いているといつぞやの猫と遭遇した。

猫違いの可能性もあるけど、毛並みとか鳴き声そっくりだし、多分だけど同じ猫だと思おう。

「……五葉さん？」

「こんな時間にJKが一人でうろついてんじゃねえよ」

ていうか、なんで猫と遭遇する日はもれなくユツキーナとも遭遇するんだ？

※

「なあ、兄貴」

「どうした妹よ？」

「…… なんて、ウチ兄貴とセッションする流れになったんだっけ？」

「たまたまそこで偶然会ったからだろ、おまけ付きで」

俺の妹こと五葉蜜柑はキーボードを弾きながら、俺はドラムの調子を確かめながら、そして瀬田薫なる長身の羽丘JKはギターを弾きながら演じていた。

何を？ 俺にはわからない。

「ああ、夢い！ まさか子猫ちゃんのお兄さんと相見える日がやってこようとは、なんたる運命のイタズラ！」

「…… もしもーし？」

ダメだ、この人。一回自分の世界に入っちゃったら戻ってこれないタイプの人間だ。

鮮やかな紫の髪をポニーテールで結び、一動作ごとにファッサア、と効果音付きで動く面白人間でもあるんだが、いかんせん話が通じない。

「えっと、瀬田だったか？ さっきのそこ繰り返ししてもいいか？」

「ふ、望むところさ」

…… これは、肯定と受け取ってもいいのだろうか？

我が妹の方に視線を向けると頷きながらサムズアップしてくれた。

「どうやら肯定と受け取って問題ないらしい。」

「てか、お前ら一体どういう関係だ？」

「えっと、ウチがナンパされてからしつこく付きまどうようになってきたって感じ」

「ストーリーカー、なのか？」

「同性同士だから問題ないのか、それとも羽丘は百合の花園なのか？」

「一時間後、一旦水分補給の意味も兼ねて休憩することにした。」

「相変わらず、蜜柑の技術に感心するし、息を切らさない瀬田も普通に凄いと思う。」

「未だに儂い言い続けてるし、儂いがゲシユタルト崩壊しそうだ。」

「時にお兄さん、シエイクスピアはご存知ですか？」

「まあ、一応は」

「シエイクスピアは言った、全ての出会いに意味があり一つの結末に向かっている、と」

「…… 本当に言ったのか？」

「怪しくなってきた、帰ってWikiで調べてみよう。」

「つまり、私たちが出会ったことにもなんらかの意味がある。 そう思いませんか？」

「…… まあ、あると思いたいな。 そうじゃなきゃ人生楽しくない」

「一旦瀬田の話を区切り、一本失礼させてもらう。」

「喫煙スペースのないスタジオのため、この部屋で吸うしかない。 禁煙じゃないので」

問題はないし、予め二人からも了解は得てる。

「瀬田の考えはどうなんだ？ シェイクスピアじゃなくて、俺との出会いに何を考える？」

「そうだね……… 儂い、つまりそういうことさ」

「結論を出せよ」

俺と瀬田のやり取りは30分続いた。

※

「はよーっす」

「あ、いつつーさん。 どもでーす」

「お疲れ様です、五葉さん！」

お、今日はこいつらの方が早かったのか。

「お疲れさん、海輝のヤローから引き継いだら手伝うわ。 店長いる？」

「店長さん今上に呼ばれてるらしいみたいなので、またいつつーさんに荷物の受け入れを頼みたいと言っていましたー」

「またかよ、わかった。 メモっていつもんところ？」

なるべくあの変態とは顔を合わせないようにして、更衣室にあいつがいないことを確

認してから着替えを始める。

ロッカーを締め、店長がいつも伝言を残す場所の倉庫の前にある三段ボックスの電話機の下に手を入れる。

「……はあ、思いつきり混む時間帯じゃねえか」

「その間、アタシら表出とくんで心配しないでください」

「悪いな今井、てか今日何人来てる？」

「今日は、アタシとモカと、これからも入れたら、他は四人だったなあ」

「十分だな」

「そういや、そろそろハロウィンだから商品の仕入れも増えるし内装も外装も飾り付けないとなあ。」

「店長、ローソンとかファミマとかセブイレに売り上げ勝つか謎のこだわりある人だからイベントの時はガチなんだよねえ。」

「ていうか、大手企業に喧嘩売ってるのも中々。うちもたしかどつかの傘下だったはずだ。」

「じゃあ、しばらく俺表出とくから今井は休憩しといて」

「はーいー！」

とりあえず俺は表に二時間半出て、そこからモカとチェンジして、在庫チェックして、

吸いながらトラックを待つとしますか。

「いらつしやいませー」

※

「あ、五葉さん！　こんにちはー！」

「つぐみか、いらつしやい」

しばらくして、制服を着たつぐみと眼鏡をした羽丘の生徒が来た。

ていうか、あの眼鏡の人、どっかで見たような気もする。

「今日はいつものメンバーと一緒にやないんだな」

「ええ、生徒会の方の仕事が多くて皆には先に帰ってもらつてて。　元々今日授業が午

前で終わる日だったので」

「まあ、今日はモカ俺より早くここに来てたからな」

それでつぐみは休憩と腹ごしらえにここまで来たらしい。

まあ、羽丘とここ結構近いからな。　昼飯も買いに来る羽丘生もたくさんいるわけだ

からな。

この時間帯はやっぱ人そこそこ多いなあ、昼飯時じゃないけど小腹が空いてくる時間帯なのかもしれない。

そろそろ俺一人じゃレジは厳しいかもなあ、休憩中申し訳ないけど、一人呼ぶか。

「花袋さん、悪いけどそろそろレジ手伝ってもらってもいいか？」

「は、はい！ ちょっと待ってください！」

よし、これでこの先起こるであろうレジ渋滞を回避できる！

「お疲れ様です、五葉さん！ あと、いつもモカちゃんがお世話になってます」

「あんま気にするなって」

レジに來たつぐみと軽い世間話をしながら商品をレジに通していく。

なんだろうな、つぐみからは他のAfter glowメンバーとは違う母性を感じさせるところがある。

リーダーはひまりらしいけど、つぐみは本当に色々と苦労してそうだ。

「あ、五葉さん！ 二週間後羽丘で学祭をやるのでお時間あれば是非来てください！」

「おう、前向きに検討しておくよ」

そう言って眼鏡の羽丘生と一緒に行ってしまった。

レジはそこまで並んでなかったので話し込んでしまったが、これからはそういうわけにはいきそうにもなかった。

※

久々に大学に来た。

今やレポートなんかもPCで済ませてしまう時代なので、そういうことはする必要がない。

きちんと出すものは出してるし、一応あの変態と違って単位はしっかり取っている。ならば何故来たのか、疑問に思うだろ？

金をもらいに、じゃなくて、オープンキャンパスのバイトである。

まりなの代わりとはいえ普段そんなに大学に顔出してない俺が大学の顔の一人として出てもいいのか些か疑問に思ったが、大学の施設の詳細、地理を把握しておけば問題はなさそうだった。

海輝もコンビニの方だし、気楽に有意義な時間を過ごせそうだ。

「すみません、対策講座の方はどちらでやってるのでしようか？」

「過去問対策講座の方でしようか？」

「そうです」

「そちらでしたら、この建物の突き当たりを右に下りてそのまますぐ行くとD棟の入り口で案内してるのですぐにわかりますよ」

「ありがとうございます」

……
ていうか今の人めっちゃどっかで見たことある気がする。

日菜と髪色そっくりだし、雰囲気全然違うけど、目の奥の色とか佇まいがそっくりだった。

まあ、他人の空似ってことでいいだろう。

いくら地元とはいえ、華丘大学は全国からオープンキャンパスに来るくらいそこそこ大きな大学だ。

そうそう知り合いに会うなんてことないだろう。

「あ、五葉さん。何してるの？」

「……世間って狭え」

※

思いの外来校者が少ないということで業務終了ということになった。

蘭もまだ残ってるということ、せっかくなので合流することにした。

「つーか、お前まだ高一だろ。もう進路考えてんの？」

「ぼんやり、しか。父さんとの約束もあるし」

さてはコイツら、また喧嘩したな。

「で、五葉さんってこの人だったんですね」

「まあな、言っただけなかつたっけ？」

「私は聞いてません」

そういうえば蘭とはあまりそういうこと話すことなかったか。

基本コイツと話すことは父親の愚痴かバンドのことだもんな。

「それで感想は？ 華丘の」

「…… 五葉さんが受かったんなら行けそうな気がしてきました」

「喧嘩売ってんのか」

失礼なやつだ。

俺も蘭も腹が減ったという意見が一致したので、大学食堂に向かいながら自分でもよくこんなところ受かったなあとしみじみと思う。

「ま、こここの偏差値そこそこ高いからしつかり勉強しとけよ。 早いうちにやっておく

ことに越したことはねえ」

「ていうか、五葉さんってどうしてここを受けたんですか？」

「俺？」

食堂に到着し、食券を買う列に並んでいる間に蘭が尋ねてくる。

思えばここに来るのも結構久しぶりだ。

「…… 深い意味はねえよ、国公立ならどこでもよかった」

「…… どこでもよかったで選ぶようなところじゃない気がしますけど」

「まあ、両親が煩かったつてのもあるな。頭の堅い頑固な両親がな」

目指すなら高偏差値、俺たちは子供の頃からそう言い聞かせられて生きてきた。

俺としては問題なかった、目標は高い方がモチベーション上がったし、結果を勝ち取った。

五葉家の謎ルールの一つとして、大学に進学したら一人暮らしを始め、そこから先は自立するというものがある。

蜜柑はまだ実家、邦は行方知れず、姉ちゃんは就職してる。

追い出しておいて心配なのか知らねえけど、たまに蜜柑がうちに派遣される。生存確認とか言ってたが、墮落してようなら連れ戻して説教でもするつもりなんだろうな。

姉ちゃんが何度もそうなるのを見たことがある。

(……蘭と話していると、家族のことを考えちまうな)

境遇が似ているかだろうか、蘭にもつぐみとは違った母性のようなものがあるからなのだろうか。

適当に席を取り、俺は牛丼、蘭は蕎麦を食べ始める。

お世辞じゃないけど、ここの飯はそこそこ美味しい。

「そーいや、お前ら卒業しても A f t e r g l o w としての活動は続けるつもりなのか？」

「一応、皆進路がバラバラになったとしても集まる口実になりますし」

そう、それこそが A f t e r g l o w の元々の結成理由。

モカから聞いた話ではあるが、仲良し幼馴染五人の場所。

「ま、しつかりあの人説得しろよ」

「…… うん」

今度、美竹さんを飲みにも誘おう。

※

モカにスタジオ練に誘われた。

「ちよつと待て、他には誰もいないのか？」

「そうですよー、私といっつーさんの二人つきりですよー、えへへへへ」

にへら、とモカはギターを持ちながら笑う。

…… ギター、か。

「たまには、俺もギター弾いてみるか」

「あれ、いっつーさんドラムじゃないの？」

「メインはな、一応ギターボーカルもやってた」

リーダーの謎方針だったけど、できる範囲が広がったという意味ではあんな人の元で

も得れるものはあったってことだな。

「——私ら二人でユニットでも組んじやいますか?」

「そういうことは一回でも合わせてから言えよ」

だが、俺はギターの方は弾ける曲はかなり限られてくる。

あくまでも、ギターの方はサブであり、ドラムほど慣れてはいない。

「じゃ、そつちに合わせるから頼むよ」

「いえっさー」

モカの話によると、今日 After glow のメンバーは用事が重なってしまったらしい。

それで一人暇だったモカが俺に声をかけたとのことだ。

先日作ったばかりという曲「Heyday 狂想曲」をギターパートからドラムパートの二回に分けてモカの練習に付き合った。

羽丘の学祭で演奏するらしく、それまでに完成させないといけないらしい。

んで、モカはどうもこの曲で上手いかない部分があるらしいので俺にも見て欲しいと言ってきたんだけど……

「…… お前、この曲苦手とか嘘だろ。 ほぼ完璧じゃねえか」

「ほぼ、じゃダメなんです。 蘭たちのために、集まってくれた人達のためにも完璧に

しなきゃですよ」

「…… お前、そんなこと考えるタイプだっけ？」

「まあ、モカちゃん的にはこの辺でもいいかなあと思ってるんですけど」

「おい!!」

「だって、こうでもしないと、いつつーさんを誘う口実が、思いつかなくて」

演奏中にも関わらず、モカの声はギターよりもドラムよりも大きく俺の耳に届いた。

「…… お前」

「なんちゃって、照れちゃいました？ 照れてます??」

「ガキに欲情はしねえよ」

「まったく、最近の高校生は蜜柑もそうだが、色気付きすぎてやがる。」

「第一、まりなを裏切るようなことは絶対にしない。」

「…… 割と本気だったりするんですけどねえ」

「はいはい、んなこと言ったらお前のファンが勘違いするぞ。 次やるぞ」

「…… しゅーん」

「…… ちよつと言い過ぎたかな。」

「まったく、帰り山吹ベーカーリーのパン買ってやるから元気出せ。」

俺も言い過ぎたよ」

「わーい、いつつーさん優しー!」

うーん、こいつの掌の上で踊らされてる感じがイマイチ気に入らないが、別にいいか。
ドラムでリズムを取りながら、再び演奏に戻った。

11. ある悩めるJKの青春協奏曲

「どう、かな？」

「別に悪くはないと思う。あまり細かい指摘はできんけど、Afterglowらしさは出てると思うぜ。これをPastel*Paletteが歌うつてのはイメージしにくいが……」

「……やっぱりそこ、ですよね」

蘭がウチに来た。

もう何でウチの場所と部屋番号を知っているかなんてことは聞かない。

絶対モカが教えた、そうとしか考えられない。それに知らない奴が来るよりはマシだ、俺だって大人だからその辺は弁えてるつもりだ。

用事もモカと違ってまともなものである、ただ美竹さんから後々何か言われそうで怖い。

あの人の親バカは筋金入りだし、根が真面目というか頑固なところあるから下手な言い訳や弁明も聞き入れてくれないこともある。あ、それは娘である蘭も一緒か。

「何?」

「別に」

睨まれた、おーコワイコワイ。

「話を戻すが、これはまだ未完成なんだよな?」

「うん、何か物足りない。その、あと一つ欠けた何かがわからなくて」

「短期間でここまで仕上げられるだけでも大したもんだけどな。最近の高校生ってのは本当に恐ろしいよ」

世間的にガールズバンドがブームになってる今、そういつた音楽関連のグッズや機材も俺がバンド組んでた頃よりも沢山出回るようになった。

こいつらは環境的にも恵まれてると言えるのかもしれないな。

「……一本だけ吸っていいか? 頭が回らん」

「このニコ厨」

「やかましい」

考え事に糖分と言うが、煙草も必要だ。こいつがないと頭が回らねえ。

あれ、これ普通に中毒者のセリフじゃね?

「ていうか、今日は他のメンバーはどうしたんだよ? その曲だって皆と考えて作ったんじゃないの?」

「巴とひまりは衣装探し、つぐみは家の手伝い、モカは多分バイト」
「……そっか」

モカって今日シフト入ってたかな？ 俺が直接管理してるわけじゃないが記憶があのやふやだ。基本シフトは店長が決めてるからなあ、俺の場合は自分で勝手に組んでるけど。

バイトじゃなかったら逆に何してるんだろうな、なんてことは思いつかないからバイトという件事におこう。

「それで、五葉さん一回歌ってもらってもいいですか？」

「今世紀最大級の無茶ぶりだな、オイ!?!」

さつき一度聞いたばかりの曲を歌えと!? 全然覚えてないんですけど、歌詞もそうだが音程も怪しい。

「ていうか、俺ボーカルじゃないからそんなに上手くないぞ?」

「大丈夫、父とよくカラオケに行ってることは知ってるので」

「……あの人は」

飲み会だけでなく、美竹さんにはよくカラオケにも誘われる。何でも、湊さんに勝つか何か言って意見やら色々求められる。

まりなも一緒についてくることも多いなあ、あいつも昔はバンド組んでたんみたいだ

し、ていうか俺の周り改めてバンドしてる知り合い多すぎじゃない？

「…… わかった、けどまだ覚えてないしうちじや近所迷惑になるから場所は変えるぞ」

「覚えるのに必要な時間は？」

「三日は欲しいな、間に合うか？」

「十分」

今回、AfterglowはPalettes*Palettesに楽曲を提供することになったらしい。そこで製作途中のこの曲に対しての意見を俺に求めてきた。

これはAfterglow以外が歌うことになる、つまり自分たちでない声でこの曲がどのような形になるかのビジョンを蘭は確認したい。そこで俺に歌って欲しいとのことだ。

楽曲提供は早い方がいい、事務所には焦らなくていいと言われたそうだがAfterglowのメンバーは早い方がいいと判断したようだ。

その判断に俺は意見は挟まない。

「おっけー、引き受けた。このCDしばらく借りるぜ、あと、キーは変えても問題ないか？」

「できれば原キーだとありがたい、かも。 うーん、でも、まあ、変に弄りすぎなかった

ら問題はないですよ」

難易度が少し上がった。

※

蘭が帰ってから早速買い出しに出かけた。

もちろん曲は聴きながらだ、散歩とかしながら聴くと結構覚えやすいからな。それにそろそろ酒も食材も切れかかってたところだった。 それ

いつものスーパーに行き、やまぶきベーカリーにでも寄って帰るか。

あ、そろそろ銀行から金も下ろしておきたいな。

※

「……なんでAfterglowの皆さん全員集合してるんだよ」

「言ってますんでした?」

「聞いてません」

蘭と待ち合わせをしたスタジオCIRCLE前には五人のJKが待ってた、聞いてないぞ蘭。

「いつつーさんがあの曲を歌うと聞いて〜」

「それであたし達が演奏をしようって話になったんだ！」

「なんか蘭以外の声で演奏するのって初めてだから緊張しちゃう！」

「今日はよろしくお願いします！ 五葉さん！」

なんかハードルがさらに上がってる件について。

これでもし俺が間違えたりしたら、大問題じゃねえか。

「…… 先取つといてくれ、ちよつと一本」

「いつつーさん照れてる」

※

受付をしてたまりなから部屋番を聞いて部屋に向かう。 まだ準備中のようが一番

暇そうにしてるのはモカだった。

「暇そうだな」

「モカちゃん手際がいいんでね、ポーツとする時間も必要なわけなんですよ」

「意味がわからん」

顔を逸らされた気がする。

マイクの方は蘭が用意してるけど、俺が歌うってことはあいつ今回やることなくね？

ギターオンリーで一曲合わせるのか？

「私はここで全体聞いとくから、五葉さん準備できたらいつでもいいですよ」
「…… お前な、俺結構緊張してるんだぞ？」

何が悲しくて作詞作曲をした張本人の前、ましてや曲を作り上げたといつても過言ではないバンドの生音楽で歌わなきゃいけないんだ。

しかも本人達の前で生歌とか、俺メインドラムとギターよ？

ボーカルなんてやるかやらない程度の頻度だよ？

「まあまあいつつーさん、勘弁したってください。あんなこと言ってますけどなんかんや蘭も楽しみにしてたんですから」

「ちよ、モカ!？」

やめて、余計にプレッシャーがかかる。

「大丈夫ですよ五葉さん！ 私たちが全力で演奏するので何も心配することはありません！ リーダーの私が言うんですから！」

「なんか余計に不安になってきた」

「なんでー!？」

いや、だってひまりだし？

俺の言葉に皆頷いてるし？

「…… まあ、頼まれたからにはやるが、あまり期待はするなよ？ 三日で何とか覚えれ

るだけ覚えたが、それでも急作りだったんだ」

「わかってます」

「——じゃあ、いくぞ。みんな」

曲名は、Y. O. L. O !!! (今知ったとか言えない)

※

若干歌いやすく歌詞をアレンジしたことがバレて蘭にお小言をくらってしまった。

うむ、やはり原曲通りにいくのが一番だけど、楽曲を提供するということはこういうことも考えられる。

けど、今回俺が歌ったことに関しては完全に俺の独断だ。素直に謝った。

あと、モカ。俺だってちゃんと謝るときは謝るからな？

「それで、他人が歌った感想は？」

「うん、やっぱり結構変わるもんですね。特に五葉さん男声なので力強いというか、低

さがあるというか」

「まあ、そのへんは女声とは大きく変わるからな」

あんまり詳しくはないけど、喉仏が関係してるって話は聞いたことある。

そのへんの振動によって高音と低音が使い分けられてるんだとか何とか、あまり意識

したことはないけど。

「これをパスパレが歌うんだよな？」

「……正直、イメージができない」

「安心しろ、俺も全然それらしいビジョンが思い浮かばない」

でも、逆に演奏したらどんな風になるのか気になるのは気になる。

ボーカルである丸山彩のあのふわふわボイスでこの曲を歌うのか、どういう風に編曲されるのか。

「今日はありがとうございます」

「いや、いいよ。俺も勉強になったし、この曲ってまだ公開しちゃマズイやつだよな？」

「ええ、一応」

こいつらだけの問題じゃないからなあ、芸能事務所が絡んでくるとどういいう問題が起ころるかかわかったもんじゃない。

「お待たせー！ 飲み物買ってきたよー！」

「パンは〜？」

「頼まれてないものは買ってきてないよ!？」

——さて、どうするか。

こっちもこっちでいい具合に進んでるんだが、上手くいくかどうか。

「なあ、蘭。ちよつと相談なんだけどさ」

「どうしたんですか、改まって気持ち悪い」

「…… お前ハッキリ言うな、実はな——」

※

「五葉さん、いますかー!？」

「ドアを開けてから言う台詞じゃねえな、それ」

先週は蘭が部屋に来て今日はリサかよ。いや、リサはよく来てるか。

でも、時間帯がレアだ。夕方にくるなんて今の今までなかった、大体リサの来る用

事が夕食のおすそ分けが多いからな。

——いつもありがとうございます。

「んで、今日はどうしたんだ？」

「これ、とりあえずこれ見て！」

「…… 作詞コンテスト？」

リサのスマートフォン画面にはそう表示されていた、詳細を流し読み程度で確認すると読んで字のごとく作詞コンテストをやるらしい。

ネットで募集してるところを見るとプロもアマも素人も俺でも、参加する権利はあるみたいだ。

「アタシ、Roseliaの為に何かできないかと思ってこれを見つけたんです」

「このことユツキーナは知ってるの？」

「知りませんよ、アタシが勝手にやって驚かそうとしてるのに！」

なるほど、いわゆるサプライズ。隠密活動というやつか、宇田川が好きそうでやりそうなことだ。白金あたりを巻き込んで。

「それで、今色んな人に作詞をどうやってるのか聞いて回ってて、参考までに五葉さんにも何か意見をもらえたらな、なんて」

「どうしてそうなった」

作詞なんてやったことないぞ。

「いやあ、今まで女性の意見しか聞いてこなかったので男性の意見も聞きたいなど、五葉さん昔バンド組んでたんでしょ？」

「それ言ったっけ？」

「ミカンから聞いた」

「なら仕方ないな」

もうあいつの口の軽さを治すのは諦めてる。言っても聞くような奴じゃないしな。

「まあ、いいか。　そういうことなら俺の意見でよければ協力するよ」
 「本当ですか!？」

「あと、何度も言うが俺は作詞なんてやったことない。　それとこの後まりなが来るからあまり長居すんなよ」

「エッチなことでもするんですか?」

「しねえよ、阿呆」

蘭といい、リサといい、まりなどいい最近音楽の相談をよく持ちかけられるな。

※

「そうだな、一般論的などころからいくと作詞は文法よりも語感が大切になってくる。

そこで大切なのは単語や文章の末尾だ」

「末尾?」

「例えば、歌詞の中に愛してるという言葉があるとする」

「……　なんでそれに例えたんですか?」

「よくあるからだ」

正直俺もパツと出た言葉を出しただけだ、特に深い意味はない。

「愛してるの末尾の母音はU、そこで同じ一節内の歌詞に繋げて終わる言葉は末尾の母

音がUになるのを選ぶのと不思議と音が自然となる」

「ふむ、ふむ」

「たしか、和歌や短歌、俳句にも使われてた。表現の名称は忘れちゃったけど、歌詞を意識して見てみると結構多い」

一番と二番の歌詞とわけて書くときにも使われてたな、こうすることで員が踏みやすいらしい。

「愛してる、なら次の一節に繋げ文末の言葉には溢れてる、とかな。一見関係のなさそうな言葉でも不思議とそれっぽくはなるはずだ」

「あー、なんかわかります」

「大体歌詞つてのは、曲のリズムが出来上がってからそれに合わせるようにして詞を添えるつてのがよくあるパターンだからな。もしかしてRoseliaの音楽つて全部ユツキーナ任せなのか？」

「そうなんです、友希那つてば気がついたら曲作つてきちゃつてて」

やはりあいつ天才か。

湊さんもその辺のことべた褒めしてたしなあ、自分よりも遥かに優れた才能を持って生まれてきた娘だつてな。

……正直、初対面が猫と戯れてる時だったから、あまりそういう印象はなかったん

だけど。

「うんうん、なんとなくわかってきました!」

「本当に?」

「はい! いつもは友希那が作ってた、それってつまり友希那がレシピを書いてお菓子を作ったようなもの」

「……ん?」

「アタシにはアタシにしか書けないレシピがある。それをその後調理するのは友希那、正直友希那が作詞の基礎基本を知ってるのかは別として、それもまた受け取り方も変わる」

「ま、まあ、そうなるだろうな」

「同じレシピでも、出来上がるものには差異ができる。それはおかし作りでも変わらない!」

「……なんでお菓子?」

「いやあ、モカと話してましたら歌詞と菓子を掛けるみたいになってしまった」

さすがモカだ、そこに乗っかるリサもリサだと思うけど。

「それなら、五葉さん! この部分なんですけど、こうするのはどうですか?」

「ん? いいんじゃないのか、それかもしくはここをこうして——」

結構楽しくなっちゃってしまっ
た。まりなが来るまでリサと作詞作業に勤しんでしまっ
た。

……今度Afterglowにライブの礼に一曲贈ってやるかな、作曲やったこと
ないけど。

12. ある物語の終わりの始まり

「あ、いつつーさんお疲れ様です。少し遅かったですね〜」

「五葉さんがアタシ達より後なんて珍しいですね、お茶でも飲みますか？」

「——いや、一本吸わせてくれ！」

もう、限界ツ!!

モカとリサの二人が座ってるテーブルの奥にある喫煙室へと急ぐ。

ライターはつと、たしかズボンのポケットだったな。

「ふう」

「禁煙するつばいこと言ってますでした〜？」

「気のせいだ」

11月も中旬、すっかり寒くなつちまつた日々が続いてる。

こういう日もやはり俺はタバコを求めちまつてる辺り、愛煙家とカテゴリされる人間なのだろう。

だけど、ちょっとくらいは許してほしい。さつきまで大学に行つてたし、会議室は

禁煙で三時間は我慢したんだ。ここに来る途中も歩きタバコなんて行儀の悪いことはしていない。

「さて、そろそろ仕事しますかね。店長は？」

「そろそろ五葉さんが来る時間だな、って言つてどこか行つちやいましたよ」

「……あの人は」

多分取引先なんだろうな、そうだと思いたい。そうでなくとも仕事関連であつてほしい。

とりあえず着替えを済ませて、表に出て店内の様子を確認しつつ、商品の補充をして、在庫の確認。トイレ掃除を済ませて休憩することにしよう。

「……お前らいつまで休憩してんの？」

「いつつーさんが着替え終わつたらレジにでも行こうかと」

「はよ行つてこい、どうせ人間さんに任せつきりなんだろう？　これから忙しくなるから早めに準備しとけ」

「しゅーん」

「つたく、帰りやまぶきベーカリーでパン買ってやるから、さつさと行つた行つた！」

「いつてきまーす」

まだ、まだ生きていけるぞ。

モカのパン代が俺の財布から消えたぐらいで生活できないなんて柔な稼ぎ方してないからな!

それに今回は日雇いのバイトも入れたし、普段より貯蓄はある。

「五葉さん、モカの扱い上手くなってないですか?」

「そうか?」

「だって、初対面の時と比べたら」

「……忘れてくれ」

新人研修でモカを担当したときは、うん、なんていうかコミュニケーションが取れなかった。基本的に上の空だし、何考えてるのか全然わからなかったからそれはもう苦労したもんだ。

その癖、教えた内容はしっかりと覚えて出来るようになってるもんだから、感心するしかなかったよ。

とりあえずは品出し、立ち読み客の追い払いをしながら店内のモップ掛け。

この前、立ち読み客を追い出してネットで炎上して以来立ち読みする奴らは減ったが、それでもゼロではない。

店長に徹底的に禁止するようにテープ貼りを提案したのだが、未だに実行されないことから、うちはこのスタンスでいくことは決定事項なんだろう。

トイレに客が入ってないことを確認し、清掃中の看板を置いて掃除を始める。トイレトペーパーを無駄に使う輩がいるもんだから余計な出費が増えて仕方ない。

このことも店長に言って経理に相談してもらおうことにしよう。

「いつつーさん、発注してたお菓子が届きましたよ、てんちよーいないんで代役願います」

「わかった、じゃあモカはこの掃除やつといてくれ。中途半端だからさ」

「おっけーです」

デッキブラシとバケツをモカに託して裏手に回る。レジは入間さん一人だけみただけけど、問題はなさそうだ。

軽い会釈をして、レジの奥手にあるスタッフルームを抜けて裏口から外へ出る。

「いつもご利用ありがとうございます、こちらの方に判子とサインの方を」

「あ、はい」

もうこのやり取りにも慣れたものだ。

商品の発注は基本的に店長と変態の親子が担当してるから余分な注文はしてないだろう。

しつかりと売り上げに則ったうちのニーズに合わせた量を注文しているはず。店長は全面的に信用してるが、息子の変態の方はあまり信用してない。そういえば最近

あいつの顔見てないな。

「三木くん！ ちょっと運ぶの手伝って！」

「わかりました！」

この後、店長は俺が業務終了しようとしてる時間にやつとのことで戻ってきやがった。

どうやら電車の方が遅延していたらしい、なら仕方なしだな。

業務が終わり、約束通り俺はモカを連れてやまぶきベーカリーに向かう。

商店街は基本的に店が閉まるのが早い、やまぶきベーカリーも例外ではないが俺とモカの上がりには夕方だったので走れば間に合う時間ではあった。

——ちょっと待ってモカさん、走るの早すぎじゃありませんこと？

※

「いらっしや——、あ、モカ！ いらっしやい、もう閉めようかと思つてたところだよ

！ 五葉さんも」

「せーふー！」

「ゼエ、ハア、ちよ、ちよつと、まつ、タ、タンマ、あッ……」

しんどい！

羽丘の近くのコンビニからやまぶきベーカリーのある商店街までの休憩なしのマラソンはキツイ!

「さーや、まだパン残ってる〜?」

「残ってる残ってる! わざわざ来てくれたし、サービスしたげる!」

「ほんとう? やったー、といつても今日はいつつーさんの奢りなんだよね〜」

「そつかあ、じゃあ…… やめとく?」

「なんでやねん」

※

国立華岡大学の学祭はアホみたいに規模がデカイ。

研究発表はもちろん入学希望者が全国から押し寄せてくるし、有名人を招いてのステージもいくつがある。使えるところに金をバンバンと使うところでも有名でもあり、あの弦巻財閥とも関係があるとかないとか噂もされている。

B級グルメグランプリも何故か大学構内で行われるし、学生が主体となって行うステージや舞台もそれなりの数と規模があるわけで、それを準備・取りまとめを行う実行本部は毎年この時期になるとんやわんやと大騒ぎをすることになる。

今まで俺は関係なく、お疲れ様と遠目で見ているだけだったんだが、どうも今年はこの

ちららに参加しなくてはならない状態となつてしまった。

「で、まりな。メンバーの方はなんとかなりそうだが、曲も俺たちのカバーでいいのか？」

「うん、君楨の演奏してたもので全然大丈夫。あ、でも私もちよつと演奏したいやつあるから、譜面の準備急ぐね」

「……にしても、まさかあいつらに感化されてこんなことになるなんて思いもしなかつたよ」

本当、人生つてのは何が起こるか全然わからねえ。

「それで、当日の予定と、あとこれが予算と設備なんだけど——」

「なるほど。こつちの方はまりなの方が詳しいだろ、俺はほとんどわからないし、下手に弄れないから誰かあともう一人助っ人とかいる？」

「こつちで応援呼ぶから大丈夫！ 機材関係の方なら宛てもあるし！ 衣装の方は？」

「白金に教えてもらつて、少し頑張つてる。無理なところとかは任せる形になつちまつてるけど」

「白金さんに？」

この前あつた手芸教室でまさか講師側に参加してるなんて思いもしなかつたからな。

その際、一緒に参加したひまりからはAfterglowのマスコット、というかあ

れは、なんといえはいいのかわからないストラップをもらった。もう一人、奥沢も一緒に参加したんだった、なんていうかあの人も上手かったな。

最近のJKは女子力が高いことで。

「そういやこの美術部の展覧会の場所の予約申請はまだ取りに来てないんだよな？」

「そういえばそうだね、本部の方に誰もいなかったら二人で待つてよつか」

「…… そうだな」

本来ならこんな一銭にもならない仕事糞食らえだが、まりながいるなら別だ。

「CIRCLEの方は大丈夫なのか？」

「うん、あの子が頑張ってくれてるから私もある程度自由に動けるんだよ」

「ハハ、それはありがたいな」

お陰で二人でいれる時間が増える。なんて恥ずかしいこと、言えるはずもない。

まりなはそんな俺の顔を見て微笑む、なんかむず痒い。期間限定で設置された実行本部のある部屋はやはり誰もおらず、鍵を持つてるまりなが部屋の扉を開けた。

「…… 残り一週間。 感覚思い出してきたか？」

「もつちろん、私が言い出したことなんだから」

「…… そうだな」

——音楽を奏でるのはお前らJKだけじゃねえつてことを教えてやるよ。

※

華岡大学文化祭。

11月の中旬という少し肌寒い季節に行われはするが、それでも人の熱気というのはすごいもので俺は現に半袖である。

「——改めて思うと、中々濃いメンバーが集まったよな」

「そうかな？ 私としてはこのメンバーで演奏できるつてすごい楽しみだよ！」

ボーカル兼ドラムの俺、リードギターのまりな。

「北沢君もありがとう、店の仕事もあつただろうに」

「いいんですよ、先輩との演奏も久々ですし、妹に兄の威厳というものも見せてやらねばなりませんし」

「そっか、ハロー、ハッピーワールドの皆も呼ばれてるんだつたね」

「兄貴兄貴ー、ウチキンチョーしてきたんですけどー」

「お前が緊張するなんてことないのは知ってるから安心しろ」

「うえー」

ギターの北沢君、キーボードの蜜柑。

「君楨からの頼みなんで、断る要素ないだろ？ それに、久々の出演なんだから」

「本来なら頼みたくなかったんだけどな、この際仕方ないと思った」

サブボーカル兼ベースの変態こと海輝。

「じゃあ、打ち合わせ通り俺がドラムやってる間は海輝がボーカル。俺がボーカルやってる間のドラムだが、本当にできるのか北沢君」

「大丈夫です、俺も元C a m e r e o Nの一人ですよ。練習の時も大丈夫だったでしよ?」

「……すまん、どうしても心配になっちゃってな」

「君禎はもう少し人を信用してもいいと思う」

——変幻自在がウリのバンド、C a m e r e o N。

俺と北沢君の元いたバンドでそこではリーダーの方針でいくつかの楽器を演奏技術が必要とされていた。

そのスタイルを取り入れつつ、まりなの思いで俺たちは今できるメンバーを集めてこの文化祭で嵐を呼ぶ。

「まったく、すっかりしてくれよリーダー!」

「ちよつと待て、俺はリーダーじゃないぞ!」

「これだけは言わせてもらおう!」

リーダーはまりなだ!

「おほん！　じゃあ、皆！　私のワガママに付き合ってくれてありがとう！

——最高のステージにしよう！」

まりなの手が差し出される。

「はい！」

重なるのは北沢君の手。

「上等っす！」

蜜柑の手。

「世界は俺を呼んでいる」

海輝の手。

「…… ああ、やってやろう」

——そして、俺の手。

「——ピースメン！　ファイター！！」

——これはJK達による物語。

しかし、あるいはひよつとして、JK達に感化された者たちがいたかもしれない物語。
ピースメン。

この五人が世界へ羽ばたく物語の始まりにすぎないのかもしれない。